

人種，自由，平等，博愛 フランスにおける科学と政治の間での 「人種」概念の来歴（1815-1840）

クロード=オリビエ・ドロン*
（福崎裕子 訳）

本論文の目的は、「人種の科学」がフランスにおいて精神科学・政治学の中に導入された条件を改めて考え、それにより、歴史記述の中で時に有力になっている二項対立を超えて、この「人種の科学」という知が、普遍主義と差異主義との間、また、生理学的決定論と精神的自由との間の緊張の場に占めている複雑な場所を明確にすることである。どのようにして人種の科学がまず自由主義の計画を通して政治に入るかを検討する。そこでは、人間の本質は自由の改善可能性と普遍的展開の印の元に考えられていたが、その実現を遅延する（*différer*）——変化させる、あるいは妨げる——一連の障害を考えるのに人種が役立っていた。しかし、そこで人種が占めた場所は多様であり、それを再現する必要がある。次に、人種の学説が形成され、それが政治分析の中に書き込まれるに当たり、いかに1830年代が決定的な時期であるのかを検討する。その形成と導入は、単に自由主義・共和主義の流派だけでなく、またとりわけサン=シモン主義の諸流派との関連を持ってなされる。それは、人種の科学が、自然史、文献学、歴史の交差する点で制度化される時である。この重要な瞬間は、具体的にはパリ民族学会（la Société Ethnologique de Paris）の創設と、政治学と人種の科学との関連を考える様々な著作の出版として現れた。その中で最も有名なのは、ヴィクトル・クルテ・ドゥ・リル（Victor Courtet de L'Isle）とギュスタヴ・デシュタル（Gustave D'Eichthal）の著作である¹⁾。『サンスール（Censeur 監察官）』紙の自由主義者たちが指定した人種の問題を、サン=シモン主義の著者たちが取り上げ、自らの人間家族の普遍的アソシエーション政策を考えたり、人種の交錯を人類の統一と改良の手段として賞賛しながらも、自然秩序と社会秩序の関係を考えた方法を我々は検証する。

* Claude-Olivier Doron, Université Paris Diderot

1) 自由主義アジェンダの人種の科学

1825年と1826年に、精神科学・政治学の分野で重要な二冊の書籍が続けて出版された。シャルル・デュノワイエ（Charles Dunoyer）の『自由との関係において考察された産業と道徳』と、シャルル・コント（Charles Comte）の4巻から成る『法律論あるいは民族が繁栄するか、衰退するか、停滞するかを決める全般的法律の提示』の第1巻である²⁾。著者たちは無名どころではない。彼らは共に、自由主義野党の新聞のひとつである『サンスール』を、1814年の初の王政復古に際して創刊した。その目的は、特に報道の自由を含めた権利を尊重する、立憲体制を奨励すべく配慮することであった。この新聞は、いわゆる「自由党」の様々な傾向を反映し、共和派の古典的な主題を安定した立憲体制の樹立への願いに結びつけていた。しかしすぐに王政復古の最も反動的な流派との批判的議論に乗り出した。ナポレオンが政権に復帰する百日天下の間は存続し、その後中断し、同じコントとデュノワイエの編集の下、『サンスール・ウロペアン（Censeur européen ヨーロッパの監察官）』という別のタイトルで1817年に再刊された。再刊版は、第二次王政復古期には超王党派に対する自由主義者の先端的批判の1つとなり、検閲、2名の主幹の投獄、亡命といった動乱の歴史を辿って行った³⁾。同紙は1820年6月に廃刊となる。超王党派が、1820年2月13日のベリー公暗殺を理由に、反動運動を開始した時である。『サンスール・ウロペアン』を観察することで、自由主義的考察が、どのように立場を変えたのかを理解することができる。制度・機関、憲法保持、権利の自由主義に軸を定め、政府と制度・機関を自由のための闘争の中心とする論理から、社会（*société*）と、社会の利害と葛藤、大衆に中心を置く論理へと徐々に移行したのである。後者の論理では、ネーションを構成するのは大衆であり、その政府や制度・機関の形式は結局、随伴現象にすぎない⁴⁾。

政府から社会を構成する人間へと焦点を移し、自由主義者たちは、対決すべき課題として人種の問題に出会うことになる。注目すべきことは、この点において、コントとデュノワイエのみならず、『サンスール・ウロペアン』の主要な寄稿者の一人、歴史家オギュスタン・ティエリ（Augustin Thierry）も同様の見解を持っていたことだ。ティエリは、2名の主幹が司法上の問題を抱えていた時期に同紙の編集を代わってつとめ、この新聞の記事の大半を執筆したが、彼の記事は、英国史にもフランスの現状にも説明を与える人種の区分に関するものであった⁵⁾。『サンスール』の執筆者と当時近い間柄で、何度もこの新聞に寄稿していたサン＝シモンも、同様である。

コントとデュノワイエは政治ではマージナルな立場からはほど遠い人々である。デュノワイエは、1832年に精神科学・政治学アカデミー会員に選出されるが、何度も知事を務め1838年にはコンセイユ・デタの参事になるなど7月王政下で重要な役割を演じた。彼は、経済におい

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

ては、フランス自由主義の主要な代表者の一人とみなされている。コントの方は、ジャン＝バティスト・セイ（Jean-Baptiste Say）の娘婿で、セイの経済思想の主要な唱導者の一人であった。彼もまた 1832 年に精神科学・政治学アカデミー会員に選ばれ、1837 年の逝去まで下院議員を務めた。また、両者とも、歴史の究極の段階かつ人間の本質の完全な実現の瞬間としての「産業主義」の発展、すなわち、生産と商業に基づく産業社会の推進のために、活発に貢献した⁶⁾。しかし、我々がここで関心を持ちたいのは、二人が 1825 年と 1826 年に出版した書籍が、おそらく、明白に、研究された方法で、人間の人種に関する自然主義的知を政治的考察に組み入れた最初の書籍であったことだ。最も厳密な意味での人種の問題が、政治に入り込むのが自由主義者の著者においてであるということは、普通に直感されることとは逆行している。そのためにこれまで歴史記述の分析は人種主義の先駆者についてふんだんに語りながらも、この二人を対象にしてこなかった⁷⁾。このように二人が知られていないことの理由や、人種と自由主義との間の緊密な（そして複雑な）つながりを復元することの重要性について、ここで詳しく述べることはしない。単にそのつながりの存在を指摘し、それを強調する二つの指標について述べるだけで十分であろう。最初の指標はヴィクトル・コルテである。コルテは、人種の不平等に関して自然史が提供する「事実」を統合して、政治学の視点でそこから結論を引き出そうと試みた（コルテ自身がその計画を延長しようとしていた）最初の作家たちの系譜を描こうとし、その系譜の源泉にあったのはデュノワイエであるされている。デュノワイエが「人種の間には自然の不平等が存在する。それは各人種組織の発達の不平等に応じてのことである。この二重の不平等の結果、すべての人種が、同程度の文化、文明、その結果同程度の自由を持つなどということは全くあり得ない。」⁸⁾と初めて主張したと、コルテは述べている。コルテは実際にデュノワイエの 1825 年の結論を要約しており、政治における生物学的人種主義の先駆者をコルテの中に探した著者たちが、デュノワイエに関心を持つ価値があるかどうか検討しようと考えなかったことは奇妙である。その著者たちは、もう一つの標識にも気付き得たはずである。それはバンジャマン・コンスタン（Benjamin Constant）による標識であり、『デュノワイエ氏と彼の著作の何冊かについて』の中でこう指摘している。

「デュノワイエは、優れた作家たちが人種の差異に基づいて制定した新たな制度の信奉者である。この制度には一部真理がある。それは検討すると奇妙なもので、科学はその寄与により豊かになりうるだろうが、丹念に政治からは遠ざけるべきものであると我々は考える。（...）ある人種の認められた劣等性と、またある人種の優等性を出発点にして、前者の従属へと至る道は、あまりにも容易に踏み越えられる距離である。」⁹⁾

デュノワイエ —— 自由主義者が存在するのであれば、自由主義者 —— から、人種問題の政

治への導入に至るつながりは、遡ることが全く困難ではない。実際に、デュノワイエが、その著書の冒頭約 50 ページをその問題に割いている。そしてこのテーマは、彼の自由と産業に関する考察において偶発的に出現したものではなく、論理的にそこに書き込まれている。一方コントの側では、物事はより複雑である。一方では、彼の『法律論』4 巻は、ほぼ全面的に人種の主題系によって構成されており、その主題系は自然史や、むしろ人間の種 (espèces) の変種 (何故ならば、コント自身はこの単語の方を好んでおり、それは無意味ではない) によって定められた通りのものである。しかし、他方では、コントはまさにデュノワイエの論旨が無効であると訴えようとした。組織の点、あるいは知的・道徳的能力の点、従って自由への到達という点で、人種の不平等を証明するとみなされた自然史から引用した多様な証拠をコントは拒絶した。別の言い方をすれば、双方が自由の普遍的発展に関する考察に取り組むために、必要な問題として互いに対決する場という意味において、人種問題の場 (lieu) はコントにもデュノワイエにも同じものであった。しかし、それぞれがもたらす解答は、正反対である。それでもコントは人種を別のレベルに再び導入した。もはや自然史の方向ではなく、征服する人種と征服される人種の普遍的な対立という方向においてである。『サンスール・ウロベアン』において、自身同様にデュノワイエやティエリが展開した研究計画との合致の元に、コントはそうした対立を歴史の主要な原動力とした。

このようにして 1815 年から 1820 年の年代にかけ、人種の問題が自由主義 —— ある種の自由主義と強調しよう —— アジェンダに書き込まれた理由の把握を試みたい。報道の自由と啓発された世論の発展、市民権に関わる権利と義務の平等のもとに設立される社会の構築、能力に基づく政治的代表性の擁護、経済の視点では、特権と「禁止する」体制に反する商業と生産の擁護などに関する措置が奨励されるのに並行して、自由主義の漠然とした集合体を形成している異質の様々な集団が、1820 年代の転換点に共通の歴史と目的論を作り上げた。歴史とは、解放と自由のための闘争、独裁制と支配に反する闘いの歴史であり、様々な共和派の主題を採択し、それを深め、とりわけ中世のコミュン運動を讃えるものである。このような歴史はあるモデルに基づいており、ティエリはそれをヨーロッパの歴史の全般的な母型とし、コントはそれを人類の普遍的歴史の原則へと高めて行った。征服 (conquête)、征服する人種が征服された人種に課すくびきのモデルである。そのくびきは、機関・制度、法、社会的価値、公式の歴史において具体的に現れるが、そのくびきの下には従属させられた民族の密かな戦いが隠れており、民族は徐々に自由を取り戻す。このモデルが、生産者と寄生者 (parasites) とを対立させる政治的経済へと結びつく。生産者が、労働を通じて価値を生産するか、財の交換や流通を容易にすることにより、自らの産業で生きているのに対して、寄生者あるいは捕食者は、不毛な浪費の中で、他者の生産物の横領や不当占有によって生きている¹⁰⁾。強調しておこう。この歴史において、人種概念が根本的かつ肯定的な役割を演じている。一方では、人種は、貴族

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

の価値を系統だって反転するという操作の一部である。この操作は、民族に、栄光と美德ある祖先の記憶と、系統の継続性を与えることを目指している¹¹⁾。

この歴史を裏から支えているのが、自由の展開と人間能力の最大行使を人類の最終目的とする、ある目的論（téléologie）である。人類の究極の目的として提示された自由の実現に向かう普遍的な地平線の中に、人間集団の全体を書き込むことだ。人類の特徴はある本性であるが、人類の中にそれは潜在性（potentialité）の状態で存在しており、発展させなければならない。人類は、文明（civilisation）と解放（affranchissement）の二重のプロセスを通じて、この本性の実現へと向かう。コントとデュノワイエは、絶えずルソーの分析との違いを強調していたが、ルソーは「自然（本性）の状態」と「社会的状態」を対立させ、文明のプロセスを、人間を肉体的あるいは精神的に悪化させる脅威を持つプロセスとして非難する。それに反して、コントとデュノワイエは、人間の自然な状態が社会的状態であり、人間の自然史と文明史との間には対立ではなく錯綜があるという原則を働かせる。そしてこの社会的状態は、野生の段階から産業の段階に至るまで、異なる生存方法に基づくいくつかの段階を経て実現する。人類は必ずそれらの段階を辿り、その本性の実現の究極の段階、すなわち人類がその様々な能力を十全に使用できる段階に到達しなければならない¹²⁾。

「人間は、社会状態においては、野生の生活、放浪生活、農耕・定住生活にある。人間はまたこれらすべての状態において、自然状態にある。すなわち、これらすべての状態が人間にとって自然なものである。あるいは、それらすべての状態を経ることが、人間の本性の中にあるのだ。（しかし）その完全な発展に到達するために人間が経由する状態は無限で多様であるが、その中で自然状態の名に特に優先的に値するものがあるのなら、それは人間が最もその目的に近づいている状態、改良された社会の状態であり、野生の状態という名を与えられた不完全な状態ではない。」¹³⁾

その結果、幾つもの原則が出現する。まず、人間の本性を特徴付けるのは、その改善可能性（perfectibilité）であり、潜在性である。人間の本性は、歴史的プロセスを通じて展開されなければならない何かである。それは、共通で普遍的であると同時に、時間と場所によって実現や発展の異なる度合いを持ちうる一つの与件である。個人や集団が、この発展の内部で多かれ少なかれ遅れているか、固定しているかに応じて、ヒエラルキーを作り、順位づけをする優れた審級である¹⁴⁾。デュノワイエの自由（人類の目的として考えられた自由）の定義は、この視点からすると、多くを説明するものである。「私が自由と呼ぶのは、（人間が）なんらの障害もなしに（sans obstacle）（その能力を）使うことができるような状態である。人間が最も自由な状態は、最も妨げなく（avec le moins d'empêchement）それを使える状態であると考える。」¹⁵⁾この定

義の結果、次のようになる。「自由は何か固定された、絶対的なものではない。(…)自由には多少がありうる。文化の度合いに比例する。」¹⁶⁾自由は、特に人間の能力が発達している (développées), すなわち、人間が自分の潜在性を実現できるような環境にあることを前提にしている。人間が自由にその能力を使うためには、「まず、それらの能力を発達させていなければならない。(…)従って、人間は、物事の本質によって、産業、教育、身につけた良き習慣という理由からでしか (…)自由を得ることができない。(…)それ故に人間が奴隷となるのは、自分の能力を発展させず、その使用を調整することを学ばなかったという理由によってのみである。(…)人間は無教養であればあるほど、行動ができず、教養があればあるほど、自由である。自由のための真の措置は、文化である。」¹⁷⁾ここから提起される中心的な問題は、人間の能力の発展への障害 (obstacles) の問題である。その発展自体が直接に文明と産業に繋がっている。この視点においては、コントとデュノワイエは同じ問題を抱えている。疑いもなく、文明の進歩は、肉体的、知的、精神的能力の増大、故に、これらの能力の最大の行使と、従ってより多大な自由を得るにつれて、進行する。また疑いもないのは、文明が前提とするのは、その実現が段階順のプロセスをたどることで、発展の各段階は一定の生活様式につながっており、人間能力の自由な展開に有利であるかどうかに応じてその生活様式にヒエラルキーをつけることができるということである¹⁸⁾。そこで、能力の発展を多かれ少なかれ阻止する要因が何なのかを理解することが残っている。それは、人類の本性の実現として理解された自由において、差異を作る地理と歴史を解明することである。どのような条件とどのような要因が、自由の実現の度合と人類の発展の度合が深く不平等であることを説明するのだろうか。自由の普遍的な発展において、いくつかの集団を多かれ少なかれ決定的に固定するような障害が存在するのだろうか。それらの障害は、どの程度、我々の外にあり、我々の力を逃れているのだろうか (例えば、それらが気候や、肉体的組成に属するから、など)。またどの程度、それらは逆に変更可能なのだろうか。人種概念はこのレベルに組み込まれることになる。従って、疑問は次のようになるだろう。様々な人種は、その能力の発展の度合いを同じくすることができる (capables) のだろうか。特に人種は、知的・精神的発展における異なる能力を決定するような組織という点で、差異を呈しているのだろうか。コントとデュノワイエはその解答においては対立しているが、双方ともこの問題に出会い、人間の自然史の成果を使ってその問題に対処した。

自由の展開への障害の分析という点で、両者ともにある根本的な移行を行っているからこそ、二人の論旨構成の中でこの疑問は避けられないものである。その移行は、『サンスール・ウロペアン』の第1巻からすではっきりと記されている。そこでコントとデュノワイエは、彼らの研究に与えたい「新たな方向性」を強調しているのである。「市民の自由が晒されている危険は全て、政府の側から来ていた」¹⁹⁾とかつては信じることができた。啓蒙の伝統とその独裁制批判であれ、フランス大革命において、ジャコバン派が例えば、市民は必然的に有徳で、全

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

ての悪は政府に由来していると主張したときにせよ、そう信じることができた。政府が支持する独裁制の危険から身を守り、自由を保証するためには、従ってまず政治的機関・制度に対して働きかけ、自由と個人の権利を擁護する立憲制を作り上げなければならなかった。しかし、コントとデュノワイエは強調する。「市民が自由であるためには、憲法と法律があるだけでは十分ではない。それらを理解する人々と、それらの実施を望む人々と、それらを尊重できる人々が、市民の中にいなければならない。」²⁰⁾別の言い方をすると、自由の展開への障害は、市民自身の中にあるのである。市民の構成、市民の中にある力関係、また、その知的・精神的発展の程度の中である。機関・制度や法律、政府ですら、付随現象にすぎず、それらは、市民の中で働いているプロセスによって、あらかじめ大半が決定されている。

これが、例えば『サンスール・ウロペアン』の冒頭の、コントのフランス国民の精神状態についての記事に活気を与えている主張である。コントが指摘しているように、フランスは30年足らずの間に、全ての政治体制と全ての憲法を経験した。

「覆されたかと思うと制定される、長い一連の立憲行為をみると、ある疑問が当然頭に浮かぶ。それは、フランス人に欠けていたのは憲法なのか、逆に憲法に欠けていたのはフランス人なのかという疑問である。（…）フランスの不幸は、様々な政府の悪徳か悪い組織の仕方によって生み出されたものなのか、あるいは、これら政府の悪徳と悪い組織の仕方自体が、フランス国民の無知と悪徳の結果なのだろうか。」²¹⁾

これと同じ移行をデュノワイエは絶えず行っている。彼はこうして、制度・機関の形式にこだわる時には「その後ろにある国民にまで到達しようと思っていない。国民が、政府をつくる素材であることを見ようとしない。（…）政府が悪いときには、国民が優れているはずはない。」²²⁾と強調している。1844年の彼の研究を要約しつつ、デュノワイエはこの原則をさらに強調した。

「ある疑問が浮かんだ。（…）我々が求めていた自由も、そこから身を守ろうとしていた独裁制も、代わる代わる権力を握った少数の人間たちと、行動するためにその人々が自らを作ったそのやり方との中に、その原因があるのではないかと考えた。これらの原因が、完全に政府にあるのではなく、政府を輩出し、その構成員を絶えず採用し、後退させていた市民の中にむしろあるのではないか。そこから、それが市民そのもののものの中にないのなら、市民の思想、感情、習慣、感じ、考え、動くやり方の中でこそ、特に自由を研究し、その真の原因を考えなければならないのではないか。（…）私の政府についての思考の方向を変え、完全にそれを市民の方に向けることが重要であると私には思えたのだった。」²³⁾

従って、自由への障害を求めるべきなのは、市民とその構成の中においてである。「政治の人類学化」とこの原則を呼ぶことができる。それは、19世紀初頭に特徴的であり、制度・機関の形式と政府への視線を、生物学的次元であれ、歴史的関係であれ、経済的利益であれ、社会を構成する人間の方へと移行させるものであった。新たな主題が、この時期、政治の舞台に登場した。人種や、階級や、ネーションはこの移行に緊密に結びついている²⁴⁾。

そこから、政治分析の視線は、政府の制度・機関的形式から、全ての構成要素を含めた市民へと移行し、その構成要素の中に存在する人種間の関係に出会ったと理解できる。しかしこの関係は、比較的異なる二つの方向に解釈することができ、デュノワイエとコントはそれらを取り扱っていった。最初の方向は自然史 (*histoire naturelle*) によって与えられた方向である。肉体的組成と人種間の混合という点で、市民の構成は、自由と文明の展開に対して、障害になるか、助力になるか、どちらかになるのではないか。人種には、生来の不平等があり、それが自由への到達能力の差異を決定するのではないか。デュノワイエの答えは肯定である。コントの答えはより複雑だ。彼が強調するように、「ヨーロッパ人が、アメリカ、南アジア、大洋のいくつかの島々、アフリカの南と西に住み着くようになって以来、今まで考えなかったような種類の貴族が出現するのを目の当たりにしている。種の貴族である。」²⁵⁾特にラテン・アメリカの共和国は、「人種の混合と (...)、ある人種による他の人種の支配が (...) その結果起こす、民族全体の肉体的組成と知的・精神的能力への」²⁶⁾効果に関して、真の実験室となっている。そこで特に提起される疑問は、このような混合や支配関係がもたらす「精神と政治における結果」の問題である。

「特に、何人かの作家が考えるように、全ての種類の人間が、全員、同じ知的発展と精神的改善ができる訳ではないのが本当であれば、能力と精神の差異は、富の創造と流通、人口の増加、政治権力の分割と分配において、ほかの差異を生み出すことしかできない (...) 征服から生まれた反感を永続化させるのにかくも好適な肉体的差異に、知性、風俗習慣、富の差異がつけ加わったとしたら、全てのヨーロッパ民族が向かい、アメリカの共和国の白人の間にあるあの平等を、(...) どのようにして樹立することができるだろうか。」²⁷⁾

したがって、コントはこの問題が緊急課題であることを認めている。しかし、彼は、人種間に自然の不平等が存在し、能力や精神力の差異をそこから推測するような論旨を徹底的に拒絶した。逆に、奴隷制度の結果出現した人種間の抑圧という社会的な関係が、不平等と憎悪を生み出したと強調する。その不平等は、色と人種の烙印という遺伝的烙印に結びついていることによって、とりわけ奴隷制度廃止後も、極めて撲滅が困難である。

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

この事実から、コントは人種問題のもう一つの理解の方法を重視する。それは、自由の展開への障害を特定するために、自由主義者たちが人口構成を取り扱うようになった時からすでに現れていた。『サンスール・ウロペアン』の初号で早くも定義された理解の方法、すなわちあの社会的関係（rapport social）である。それはすべての複合的な社会に見られるという意味では普遍的であるが、常にある瞬間での侵略と征服に遡るという意味で、征服する人種と征服された人種の間に歴史的に構成されたものである²⁸⁾。「世界には、二つの大きな党派しか存在しない、自らの労働か所有物の生産物で生きたいと思う人々の党派と、他者の労働と所有物で生きたいと思う人々の党派である。（…）世界の起源以来、これら二つの党派が常に戦争状態にあった。」²⁹⁾と1818年にコントはそのことを書いている。ティエリ同様にコントも、それに対して、「それぞれに法律、風俗習慣、言語、祖国がある」党派の間の対立を、ある人種によるほかの人種の征服にまで遡らせて、人種間の闘争の用語で別の読解をしている³⁰⁾。したがって、オギュスタン・ティエリが1820年に有名な『フランス国民を分割する人種の反感(L'antipathie de races qui divise la nation française)』についての文章を出版した時、彼は『サンスール・ウロペアン』の見解をまさに継続している。彼の問題は、「人間の本性は、その本質に関しては自由であり、自由がその法則である（…）」一方、「我々が到達できる（…）この自由という対象と我々を隔てている巨大な距離はどこからきたものなのか」理解することである。「我々自身からではない」と彼は付け加える。なぜならば、アメリカ合衆国は自由を実現できたからだ。「我々の外にある事実から、重大で悲しい事実からである。（…）私たちは1つのネーションであると思っているが、私たちは同じ地上の、2つのネーション、思い出の中では敵対し、計画においては相容れない2つのネーションである。」³¹⁾この認識は、すでに1817年にコントにはあった。フランスでの自由の展開の失敗を説明するものは、国民の中にあり、その制度・機関だけでなく、社会的価値のあらゆる尺度を決定する、野蛮人の子孫と、彼らが隷属させた人々との間の、構成上の対立である。野蛮人の子孫たちは、祖先の習慣や風俗を保持し、無為を価値あるものとし、労働の価値を認めず、他者の資源を専有して野蛮人のように生きている。それに対し隷属させられた人々の子孫は労働し、自由のために闘っている³²⁾。これは厳密な意味での人種の対立である。なぜならば、コントが述べているように「征服が、同じ土壌に様々な人種の民族を集めた時、その各々が、先入観、風俗習慣を、その人種が区別できるような肉体的特徴に至るまで保持し、子孫に。伝達する。」³³⁾からである。デュノワイエの主張した立場との違いは、ここでは肉体的な特徴は、精神的な特徴を決定しないという事実にある。反対に、肉体的特徴は「徴候」(signes)として役立ちうる——コントによれば、「偽りの」(faux) 徴候である。それらの徴候は、個人の価値と功績を判断する。すなわち、抑圧と従属の歴史から受け継いだ社会的分類という偽りの原則として役に立つものである。ゆえに人種の問題系は、これらの自由主義作家の中では、2つの課題が交差するところに入り込んでくる。第一の課題は、

障害と、確認された不平等を説明する能力の差異を問うことにより、自由と文明の双方の発展の形式で取り扱われる人間の本質の実現の様々な度合を説明することである。第二の課題は、これらの障害の主要な理由を、政府や機関・制度の形式の中にはなく、社会を構成する人間大衆の中、その関係（支配、混合、闘争の関係）、肉体的・知的・精神的特徴の中に探することである。少し無理をすれば、そこから2つの異なる回答を特定することができる。一方では、人種間の肉体的な（*physiques*）差異こそが、不平等な知的・精神的能力を決定し（*déterminent*）、それらが、あらゆる活動と、発展し、自由に（それだけで）到達する全ての能力の原因である。これが、デュノワイエの主張した見解であり、のちにサン＝シモン主義の作家たち、特にコルテによってかなり強調されることがわかるだろう³⁴⁾。他方では、人種的差異と知的・精神的能力の間の決定論が証明され、発展と文明の差異を説明するためにその決定論が意味深いインパクトをもたらすことには異議が唱えられている。生活様式、それが意味する自然に対し多かれ少なかれ顕著な依存関係、とりわけそこから派生する社会関係（*rapports sociaux*）がむしろ強調される。各社会において、発展の度合いと自由の実現の段階を説明するのは、人種間に作られる社会関係なのだ。これがコントやティエリが掲げる見解である。したがって、一方には、人種間の肉体的な差異が自由の展開を条件づけるという生物学的決定論の一つの形式がある。他方にあるのは、人種に関する歴史的唯物論の一形式であり、そこでは人種間の社会関係が、世界史の原動力の役割を演じている。しかし、この対立にはニュアンスをつけて考えなければならない。なぜならばそれは、真逆のものの区別よりはむしろある極性を定義しているからだ。こうして、デュノワイエの分析は、様々な生活様式と、その結果として自由と文明の様々な差のある実現度の中にある社会関係を考慮に入れることを排除しない——むしろその逆である。人種問題はむしろ、異なる生産様式に応じて変化する自由の実現度を研究する前に、彼が述べる前置きである。反対に、生活様式とそこから派生する社会関係を強調するコントの立場は、肉体的・知的・道徳的差異はこれらのプロセスによって生産された（*produites*）（例えば、奴隷制度と同様に野生の生活様式は実際に、特殊な肉体的・精神的特徴を生み出す）という事実を排除しない。いくつかの肉体的特徴——肌の色のような——が、支配プロセスの間に、ある特別な社会的・精神的状態と結びつけられないことはありえないという事実も排除しない。その結びつきが強いために、彼が定期的に強調しているように、異なる「種」の間の近代奴隷制度は、特殊な社会政治的問題を提起する。けれども、異なる人種の肉体的素性が、それが保持する不平等な関係の必然的かつ不可避の基礎であるとは——例えばのちにクルテが考えるように——考えない。

この部の結論として、より細かくコントとデュノワイエの見解を検討してみよう。まず最初に指摘する点は、安易な二項対立で動くことを好む歴史記述にとっては驚くべきこととなろう。デュノワイエは、人種間の肉体的差異が彼らの精神的・知的能力を決定し、生来の不平等の

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

基であるという考えを擁護しているが、人類同祖論者（monogéniste）である。彼は、様々な人種は同じ始祖から出てきたもので、同じ種に属すると考えている。「人類のすべての変種は（...）（あるひとつの）始原的かつ原始的な類型から、多かれ少なかれ感知できる偏向をしたものにすぎない。」³⁵⁾ 彼は何らの批判的距離を取ることなく、自然史の研究成果、特に二人とも人類同祖論者であるプルーメンバッハ（Blumenbach）とローレンス（Lawrence）の研究を採用している。こうして彼は「彼らが中心に置き、人類の始祖と見ているコーカサス（人種）」を認める。始原の類型から最大の偏向をしているモンゴル人種とエチオピア人種。若干の違いがあるアメリカ人種とマレー人種³⁶⁾。この人類同祖論の図式から、諸「暗黒色人種」のヒエラルキー化の原則が生まれる。暗黒色人種たちは白人類型の「退化」（dégénération）として描写される。「暗黒色人種たちの劣等性の最終の印、彼らが白色人種の退化に過ぎないと結論づけさせる事実は、彼らが白色人種の色や特徴に戻ろうとする傾向があることだ。」³⁷⁾ すでに他所で示したように³⁸⁾、人類同祖論と人類単一性の主張は、人種主義、すなわち人種のヒエラルキー化と、人種の支配を目指す政治実践の根拠とを排除していない。それどころか逆に、それらはある種の人種主義の本質的な要素である。その人種主義を劣化（altération）の人種主義と呼ぶことができる。人種が、共通の始原的な類型が遺伝的に劣化したものとして考えられているという意味においてである。訂正し、規範に立ち帰らせるか、消滅させなければならない偏向。あるいは、普遍的発展プロセスの途上での固定化、古きものへの逆行、遅滞であり、変更すべきものである。普遍主義や人間主義は、それを望もうとも、人類の不平等論と、その政治的応用の幾つかと無縁ではなく、この点では自由主義と変わらない。

逆に、コントは、様々な人間の「種」の間にヒエラルキーを作らないように極めて注意しており、自然史がいかなる点においてであれ、人種/種の間差異が、そのいくつかの劣等性や優等性の根拠をなすことを証明したという事実を認めない人類多源論者（polygéniste）である。より正確に言うために、一方では、人種に関する自然史の知の価値そのものを批判し、「人類にある多岐にわたる種の大半のうち、学者が観察した事象の数が少ない」³⁹⁾ ことを指摘する。そこから生まれる分析の大半は偏った視点や拡大適用に基づいており、環境の要因と、生活様式に関わる要因と、人種に固有の要因とを区別し判断することができない。他方では、人類同源論者たちの「あれこれの変種が、そこからすべての他の変種が派生した原始の始祖である」⁴⁰⁾ と明らかにしようとする意志に、何らかの科学的価値があることも否定する。彼にとっては、この方向で断定ができるような事実は全く存在せず、すべての人種がコーカサス人種の始祖から派生し、コーカサス人種が完全な類型に最も近いと持ち上げる人種同原論者たちは、まやかして、「白人種の自尊心」⁴¹⁾ を表現しているのだ。白色人種の肌の色やいわゆる美を論拠にする人々も同様である。「各民族が、他民族と自らを区別する身体的特徴に、美の特別の考えを結びつける。その民族にとっては、完璧さとは、それらの特徴の誇張そのもののうちにあ

る。』⁴²⁾ある人々が人種の美の全般的評価の道具に格上げして使用した顔面角は、ギリシャ人に独特の美観の証拠に過ぎず、中国人が高く評価する小さな足と同じくらい、普遍化不可能である。白い色についても同じで、完璧さの印として価値があるのはヨーロッパ人にとってのみである。

「同じ形と同じ印が、すべての個人やすべての種において、同じ精神的または肉体的な質を表さないこともありうる。コーカサス種の個人なら顔色が健康の印であっても、アフリカ種の個人ではそうではなく、従って、ある人にとって美であるものは、他の人にとっては美ではありえない。」⁴³⁾

このような相対主義は、強調に値する。なぜならば、デュノワイエがとった普遍主義の立場に基づく人種間の自然のヒエラルキー化に完全に対立しているからである。デュノワイエの方は、美しさと色は普遍的な質であり、人種の客観的なヒエラルキーを作っていることは明白であると考えている。この見解は、これまたのちにクルテがさらに過激なものにする。より深いところで、コントは、様々な人種の間に共通の系譜を作ろうとする意思は、政治や宗教の利害と、特に人種の自尊心に導かれる判断を、自然史の中に導入するやり方であると考えている。「各々の種または人種は、その起源の古さを証明するために、コーカサス変種またはコーカサス種の古さについて行われたのと同じ論拠を使用することができる。」⁴⁴⁾ある種が、他のある種よりも完璧に近いかどうか知ろうとすることについては、「これらの疑問が裁判所に委ねられているなら、おそらく解決策はそれ自体において考慮された事物の性質よりも、裁判官が属する種によるものになるだろう。」⁴⁵⁾コントの目には、従って、様々な人種の共通の起源と、原種の性質の問題は、「科学が解決できる問題ではなく」⁴⁶⁾、あまりにも余計な課題が付け加わりすぎている。このような理由で、彼は、「変種」「人種」「種」の呼称の間で、いずれかを選ぶことを拒否している。

それでも、人類の中ではっきりと異なる「種」の存在にむしろ彼が傾くのは、気候が様々な人種の形成を説明できないことは証明されたと考えているからである。そして、人種は移住の際にも一定に変わらないままで、混血の場合を除いて、同じような個人を作り出すことも証明されたと考えている。しかし、最後に彼はこう付け加える。

「各人種において特殊な肉体的特徴を明らかにし、これらの特徴が人工的な手段で作りに出されたのか、気候の影響で作りに出されたのかを検討しながらも、私は、いくつもの原始的な種があるのか、一つだけしかないのかは全く考えようとしなかった。この問題は、自然史によって解決できるとは思われず、従って私には全く哲学的な問題ではなく、私の研

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

究対象とは無縁である。私が望むこと、それは、すべての人種の全ての人間が、同じように改良できるかどうかを解明することである。」⁴⁷⁾

ところで、この最後の点に関しては、様々な種（espèces）の間にコントが制定する区別は、本質的であると同時に無視できるものである。本質的なのは、その区別のお陰で、人種的原因の名の下にあれこれの民族間での発展の差異を説明しようとする全ての研究に反駁することができるからである。人種的原因は、あれこれの種/人種の本性の中に書き込まれているものとそれらの研究は述べているが、それらは実際には、確かに異なる種ではあるが、根本的に異なる環境・社会状況におかれた（placés dans des conditions environnementales et sociales radicalement distinctes）民族を比較している。ところが、比較が有効であるためには、同じ一つの種（コーカス、アメリカなど）の中には、同じ環境・社会状況のために、同様に互いに異なる民族がいないことを確かに保証することが必要であっただろう。コントの著作の中に大量の自然史の与件が持ち込まれていること、彼の著書では章ごとに次々と様々な人間の種を扱い、（環境や生活様式の点で）同じ条件下に置かれると（placés dans les mêmes conditions）、それらの種は同じ度合いの肉体的・知的・精神的発展を遂げることができると示されているという事実の意味がまさにそこにある。別の言い方をすれば、種の間での区別、人種という変数を、紛らわしい他の変数（気候の及ぼす直接的影響、それはコントの反駁の主要な対象である。生活様式や精神的な大義の影響、それらはコントが前面に打ち出す主要な要因となっている）から抜き出し、いかなる研究もそれがもたらした影響の存在を証明していないことを示すために、本質的なのである。そのことをコントは次のように結んでいる。

「以上のことからどのような結果を引き出すべきだろうか。人の全ての種は、それ自体の本性により平等であるという結論を出すべきなのだろうか。それは確実に違う。出する唯一合理的な結論は、我々の知識の現状では、知的・精神的能力に関して、様々な種の間にある本質的な差異を決定することは不可能であるというものだ。そして、諸国民の間で観察されるすべての差異を、知的能力間の組織の差異によって説明する学説は（...）真理にかなっていない。様々な種の性質に幾らかの差異があるとしても、それらの差異は多くの他の状況によって補われうる。」⁴⁸⁾

従って、種の差異が方法論的に本質的であるのは、まさに説明要因としてのそれを徹底的に相対化するためである。

コントが、人種間の組織の差異で発展の差異を説明している学説に言及するとき、考えているのはデュノワイエのことである。デュノワイエが直面する問題は、コントの問題と同一のも

のだ。「全ての人種能力が、同じ程度と正確さで発展を遂げられるか」⁴⁹⁾である。彼の答えは明らかだ。

「動物の他の種においては、全ての変種に同一の教育を受けさせることができない (...) と告白されている。また、例えば、フランドルの馬に、イギリスの馬やリムーザンの馬と同じ速さを持たせるのは不可能である、とも。 (...) そうすると、どうして全ての人種を同様に利用することの方がより容易だと考えられるのか。ブッシュマンと生来のヨーロッパ人との間、カリブ海人とコーカサス人の間には、番犬と猟犬の間、アラブ種の軍馬と荷車運搬に使う輓馬との間よりも違いが少ないのだろうか。」⁵⁰⁾

これらの差異はまず、肉体的組織の差異であり、自然史がそれを証明し、その差異を評価するための基準を提供している。そして、変わらず自然史のお陰で（この場合はキュヴィエ (Cuvier) とローレンスのお陰で）、組成のレベルと知的・精神的能力との間には相関関係が確認される。「知性の器官が、ヨーロッパ人の頭の中では優っており、モンゴル人の頭と特に黒人の頭で優っているのは動物性の器官である。後者二つの人種は、おそらく五感についてはより恵まれているのだろうが、当然最初の人種の方が、思考の器官によって優越している。」⁵¹⁾ 今度はこれらの相関関係によって、組織形式と、文明のレベルまたは発展能力との関係が推定（そして確認）できる。「結局は、文明の優越性は、一般に肉体的組織の優越性と一致しており、最も良くできた人種が、最も文明化された人種である。」⁵²⁾ 「我々の種のすべての動物の中で、最も文化を持つ可能性があるのは、異論なく白色の人間である。」⁵³⁾

人種間の肉体的な差異は、人間の能力の発展、従って自由に対する障害（あるいは無力の要因）を構成している。デュノワイエはこうして、様々な人種の肉体的力、知的能力、道徳的価値を検討し、あらゆる視点で意義の余地なく優越した人種は白色人種であることを明らかにする。

「組織の点から見てヨーロッパ人に劣っている暗黒色の人種は、同様の知性の力を表さず、同様の産業の資質を持たず、生来の力を芸術によって同程度に増大させることができない。一言で言えば、暗黒色の人種たちは、自らの力を同じくらい巧みに、偉大に、多様に使うことができないのである。事実が、これらのことを明白に示しているようである。」⁵⁴⁾

そして彼は、結論を出す。「暗黒色の人種の劣等性から私が引き出す全ての結論は、この人種は、白色人種よりも文化を持ち得ないのだから、自由も持ち得ないということだ。」⁵⁵⁾ 特に、人種は、進歩へのその適性によって違いが出てくる。人種に区別ができるのは、その起源による

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

よりも、むしろ自ら発展する能力によってである。「その起源の点から遠ざかれば遠ざかるほど、コーカサス人種は他の人種より進んでいる。」⁵⁶⁾アジア人の場合がその例になる。なぜならば、中国人と日本人は、ヨーロッパ文明に比較する文明を発展させたと考えられるだろう。ところが、デュノワイエによれば、そう思うことは、重大な誤りである。なぜならば、彼らとヨーロッパ人との間には、根本的な差異がある。中国の人種は、「不動性」を特徴としているのである。

「中国文明は4000年前から停滞している。それは一種の本能に似ている。可動的であると同時に進歩的である、すなわち、たえず自らを変え、変えることで改良することが本質的な性格であるヨーロッパ文明とはかなり異なる。」⁵⁷⁾

次に根本的になる論旨が、ここに生まれ出ようとしていることがわかる。いくつかの人種は、可動性、伝統や決定論の重々しさから自分を解放する能力を特徴にしている。それらの人種は、活動、産業、進歩、自由と、特権的な関係を持っている。他の人種は、保守主義と安定の中に埋め込まれており、一種の本能のように伝統と遺伝的な先入観に閉じ込められ、自力で進歩することができない。その根拠が生理学の中にあるからこそ余計に、このような差異は、文明や、宗教や、言語において具体的に現れる。生理学的決定論に反対することもできるだろう。そして、まさに精神主義的な展望において、精神と意志の自発性と、物質からのそれらの相対的な自律性を重視して、いくつかの人種は、その精神と言語の可動性や、活動や、産業によって際立つという事実を擁護することもできるだろう。それらの人種はまさに、このようにして、自然の決定論から自らを解放できる人種である⁵⁸⁾。

コントが提案する代替的読解はどのようなものだろうか。一方では、彼の主要な関心は、あらゆる直接の（direct）気候決定論——彼は、いくつかの民族の自然の奴隷制度に関する言説の根拠にそれを使ったと考えている。気候に関わる、外的で変更不可能な障害のために、進歩ができず、独裁制に従う運命の民族である⁵⁹⁾——に反して、環境状況が民族の発展に確かに介入するにしても、それらがある生活様式を奨励する（狩猟と漁業、すなわち野生の生活様式、農業と定住等）限りにおいてであり、間接的な（mediate）やり方でのみ介入する⁶⁰⁾。これらの様々な生活様式は、異なる社会関係（所有権、社会組織、家族関係、男女関係における）と同時に、身体的・知的・精神的能力の差のある発展を決定づける。徐々に極性が定義づけられて行くのはこのようにしてである。その極性をコントは、普遍的、すなわち人間の多様な種の全体に共通するものと特定する。一方には、労働と商業に基づく、定住の農耕文明が、所有地制度を伴って、暖地または温帯地域が優遇された生態的ニッチに現れ、この始源の中心地から南北両極へ広がって行く。他方で、寒冷地帯や耕作に不向きな地帯に、野生の生活様式が発展する。

その基盤にあるのは、放浪、安定した政治関係の欠如、狩猟、捕食である。この生活様式が、それ自体では人間の能力と自由の発展という点で劣っているにしても、結局は差を作る方法で、ある種の身体能力や精神的価値（特に戦争や捕食に関わるもの）を発展させ、この点で、こうした人種を定住・生産民族よりも相対的に優越したものにする。

そこから、第二の普遍的法則が見出され、コントは、いかなる種でもそれが確認できるとしている。征服する野蛮人種と、征服された定住人種との間の闘いの存在である⁶¹⁾。この動きが、社会階級へ、ついで封建体制へと社会的差別化が進むことを説明する。封建体制においては、征服する野蛮軍隊が、敗れた人々を完全に殲滅する代わりに奴隷や農奴にし、政治制度・機関を手中に収め、社会的・精神的体制を定義する。その体制においては、労働の価値は認められず、いやしい征服された人種のためのものとされ、その一方で、勝利者の子孫は生産された資源を専有することで、世襲の特権制度の中で暮らし、他の人々とは切り離されている。征服する人種と征服された人種の間この弁証法は——歴史と、検討された全ての種における社会的差異化の根本原則である——同じひとつの種の内部でも、異なる種の間でも、有効である。この視点では、ヨーロッパ人によって課された奴隷制の植民地体制は、「人種の貴族制」を「種の貴族制」に延長したものに過ぎない。コントは——全ての自由主義者のように——ヨーロッパ諸国における生産階級の漸次的な解放を賞賛するのと同様に、様々な種の解放の必要性と、奴隷の法的制度の終結を擁護する。そこで提起される問題は——1920年代、1930年代の自由主義者、サン=シモン主義者、奴隷制度に反対する者全てにおいて、人種問題に関する多数の考察に通底する問題である——、征服されたり、奴隷にされた人種が、法的に支配下からひとたび解放されたあと、同じ領土、同じ社会内での人種間の関係をどのように考えるべきかと言うものである。特に、何世紀もの隷属の間に蓄積してきた憎悪と先祖伝来の反感の関係をいかに管理し、この歴史にまつわる経済的・政治的・精神的不平等の削減をいかに考えればよいのか。コントやその他の作家が記しているように、人種間で遺伝的な肉体的差異が目に見え（色の場合がそうであるように）、偏見の対象になっている時が、特に問題である。それは、一方では抑圧された人々が、自らのみに頼り、自らの力を評価することを容易にするが、特にもう一方では、分離、不平等、対立を永続化させる傾向を生み出す。コントにより提案され、多数の他の著者も同意している解決策のうち、系統だった混血が、色に関する偏見のないポスト人種社会に到達する方法となる可能性を持つ。しかし、労働に対する深い侮蔑に裏打ちされた人種の偏見が、植民者たちに染み込んでいる南北アメリカの上流社会では、これらの偏見と闘うのは難しいとコントは考え、南北アメリカの様々な空間を植民地化するのに白人労働者を輸入することを推奨する。これらプロレタリアートの方が他の人種と混合する可能性が高いので、彼らによる混血の促進を彼は奨励するのである⁶²⁾。

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

2) 1830 年代：人種問題の栄光の年代

政治における人種の科学が 1830 年代に描いた軌跡を細かく振り返ることはここではしないし、比較的明確なプロファイルのある主体が、人種の科学の促進で演じた役割を網羅的に分析することも行わない。それらの主体は、1820 年代の共和主義または自由主義運動の集団に属し、特に 20 年代半ばから、サン=シモンに着想した産業主義的の動きに賛同するようになった人々である⁶³⁾。いくつかの事実を喚起するだけで十分である。

まず、思うままに歴史を曲解することはできるが、どうしてもこの結論に至ることは避けられない。フランスでは、政治分析の範疇としての人種という概念が、自然科学と歴史と精神科学のインターフェイスで構築され、その構築を支えたのは、自由主義者か、共和主義者か、または特に 1830 年代以降は、生産とアソシエーションに基づく社会組織の必要性を主張し、サン=シモン主義の勢力範囲に入ったいくつかの運動である。この時期の終わり、1839 年にウィリアム=フレデリック・エドワーズ（William Frédéric Edwards 彼自身が自由主義者・共和主義者のネットワークに近く、ミシュレ（Michelet）の友人である）の推進で、パリ人類学協会（Société Ethnologique de Paris）が⁶⁴⁾、「各民族の、歴史的伝統と、言語と、肉体的・精神的特徴からの人種の研究」⁶⁴⁾を目的とする世界初の学会として設立されたことは、多くの示唆を与えてくれる。そこに集まっていたのは、サン=シモン主義のエンジニアと銀行家たち（ブレール（Pereire）一家やロドリグ（Rodrigues）一家と、特にギュスタヴ・デシュタルとヴィクトル・クルテ）や、彫刻家のダヴィッド・ダンジェ（David d'Angers）やミシュレのような共和主義者である⁶⁵⁾。特記すべきなのは、この協会が、1836 年イギリスの先住民保護協会（Aborigines' Protection Society）設立に引き続き創設され、その研究が反奴隷制度の展望でなされていたことである（のちにヴィクトル・シュルシェール（Victor Schoelcher）も会員になる）。この点は強調に値する。何故ならば、それは、この協会を超えたところにも当てはまるからである。政治において人種概念を援用する著者の大半は、反奴隷制度主義者である。人種の主題系を通じて彼らは、奴隷制度も含めた法的な区別が廃止された後、人間集団間に（ヨーロッパであれ、世界であれ）制定するのがふさわしい、「自然の」、精神的・精神的関係をどのように考えるべきなのかを考察している⁶⁶⁾。19 世紀前半に、一連の人種問題が基本的な政治課題となり、自由主義者や共和主義者や社会組織の支持者たちによって論じられたのは、それがこれらの流派が提起した全般的な問題の一部になりうるものであるからだ。旧制度から引き継いだ偽りの区分が廃止され、法と誕生（生物学的意味ではなく法的意味での）に基づく不平等が解消されたとき、どのように自然の基盤に基づいた社会を作り直すかという問題である。それぞれがもたらすべき解答においては意見が異なるが、彼らの問題は共通している。彼らが一致する中心的概念は、能力（capacité）の概念である。当時の人種問題は、根本的な能力の問題と、社会秩序を作り直す際の能力の役割

と切り離すことができないようであった。

次に政治における人種問題は、最初は特殊な自由主義アジェンダ、『サンスール』学派のアジェンダの内部で提起されたことはすでに見た。今日、サン=シモン主義も含む、プロト社会主義の諸傾向が、その急進的な経済に関する構成要素もその中に入る自由主義と近接性を持ち得たことは奇妙に思われるかもしれないが、1830年代まで、これらの傾向の間の境界は通過不可能ではなく、諸傾向間の対立も固定化されるのには程遠いものだったことを思い出さなければならない。多数の個人の軌跡がそれを証明している。その軌跡では、共和主義や自由主義的発想の結社にまず関与し、1820年代終わりにサン=シモン主義に転向し、その後、自由主義に復帰するか、フーリエ主義運動や他の社会主義傾向へと転換するかのいずれかが見られる。サン=シモン自身が『サンスール』、次いで『サンスール・ウロペアン』に寄稿していたし、一時サン=シモンの「養子」と自称していたオギュスタン・ティエリについては言う間でもない。ティエリを助手にサン=シモンが『ランデュストリ (L'Industrie 産業)』(1816-1817)を発刊した時には、『サンスール』の執筆者たちと共同の事務所を使っており、どちらも同じ自由主義のネットワークに加盟していた⁶⁷⁾。このような緊密な関係があったことが、初のサン=シモン主義者の機関紙である『プロデュクトゥール (Producteur 生産者)』の寄稿者たちが、デュノワイエやコントの著作を解説する際に示した慎重な態度の理由である。その後に続く議論では、自由主義者(『プロデュクトゥール』支持者は「批判的」学派と呼ぶであろう)と、サン=シモン主義者たちの「有機的」学派である産業主義者との間の断絶をはっきりと表すにせよ、サン=シモン主義者たちは、対決が兄弟殺しの性格を持ってしまうことを意識して、コントとデュノワイエを労わるように配慮した。コントとデュノワイエが「その政治的著作や、気高い道徳的行為、思想によって与えた社会への」多大な影響と、そして特に、彼らが「我々の学説の成功のために、我々が拠り所とするような、真剣な研究に向かう態度を社会に生み出す (...) のに貢献」⁶⁸⁾したという事実を強調した。ルーアン (Rouen) はデュノワイエの著書の解説において、「『サンスール』学派」が政治分析の中で一連の移行を行い、その移行は『プロデュクトゥール』が擁護する展望を先取りするものであったことを意識している。(特に「政治の中に政治的経済」を導入し、政治を単なる「統治の科学というだけでなく、社会の集団行動と全ての活動様式の中で同時に社会を考慮する科学と考えた。政治とは、政府の管轄である機能の中だけでなく、あらゆる社会の機能の分野で、社会を考慮する科学」⁶⁹⁾としたことによる)。また同様に、産業の役割を強調し、産業と文明と種の改良との間の関係を証明していたからである。このような近接性を強調するのは、そのお陰で、いかなる点で、サン=シモン主義者たちが提起する人種問題が、『サンスール・ウロペアン』の自由主義者たちが提起していた通りの問題を、転移させると同時に延長するものなのかを理解できるからである。また、いかなる点でクルテがデュノワイエの延長線上に位置付けられるのかをよりよく把握することもできる。サン=シモン主義が、人種の問題を政治にお

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

いて再び取り扱ったやり方を詳細に分析することはしないが、『サンスール・ウロペアン』の執筆者たちが提起した問題との接点と移行点を強調したい。

第一に、すでに見たように、政治における人種問題出現の基本条件の1つは、『サンスール・ウロペアン』が行った、制度・機関と政府の分析から全体としての社会へ、特に人間集団間に成立する関係（自然の、あるいは社会的な）への移行にあった。この移行はサン・シモン主義者たちによって、再度取り扱われ、強調された。彼らにとっては「その広がり全体で (...) 考えられた社会の直接で積極的な研究。全ての側面の元に、その発展の流れの全てにおいて（なされた）研究」の中にこそ、「政治の基礎を主として探し求めなければならない」⁷⁰⁾のである。政治行動の基礎と、同様に諸社会の歴史と運命の解説原則を探すべきなのは、「人間の科学」すなわち生理学的・知的・精神的特徴における人間集団の研究の中においてである。この意味で、サン=シモン主義者は、すでに述べた政治の人類学化の原則をさらに過激なものにする。この原則を要約した題名（『人間の科学に基礎を置く政治学』）の著書のあるクルテガのちに述べるように、「あらゆる社会の第一の要素は人間であり、人間が、その自然の多様性によって、全ての様々な社会形式の第一の原因である。」⁷¹⁾その結果、政治学は、政府や、「構成的権威の変化する形式」よりも、社会を構成する人間の間にある支配、アソシエーション、悲惨、抑圧の関係と、その原因である「人々の差異」に関心を持つべきなのである⁷²⁾。

この展望が、『サンスール・ウロペアン』の執筆者たちが展開した展望を延長し、急進化した（radicalise）ものであること、それがまさに、『プロデュクトゥール』紙に掲載されたデュノワイエの著書解説が開いた議論から浮かび上がることである。ルーアンはデュノワイエに対して、政治分析の中に、社会科学と経済学を十分に導入していないことを非難する。デュノワイエは「個人的人間の科学」に閉じ込められたままである。すなわち個人とその能力の発展、個人の権利と自由を、社会分析の基礎としているからである。社会的関係を個人の集合体に還元する（このデュノワイエの読解は単純化するもので、コントにはさらに当てはまらないことを指摘しておきたい）このような「個人主義的」⁷³⁾展望に閉じこもることで、確かに「批判的」役割を演じることができ、それは古い秩序、旧体制の社会の偽りの秩序を解体するには役立つが、「有機的」役割を担うことができない。その役割こそが、建設的な基盤の上に新たな社会を組織することを今後望むなら必要なのである。分析の基礎にするべきなのは

「その存在が知られて以来の、人類全体。精神的または肉体的に支配的な部分による動きで常に代表された人類。そこで種は、不断の連続の行動と反応の中でたえず組み合わせたり、変化する様々な部分をもつ集団的な存在として現れる。また同時にそれらの部分は、共通の動きによって、共通の目的に向かって、運ばれている。そこで、人類の運動の全般的な法則と (...) 個別の社会の法則とを把握する可能性がはっきりと考えられる。」⁷⁴⁾

したがって、単なる個人的な視点を脱出して、種の全般的な地平と、個人レベルを超越するより大きな集団（民族、国民、階級、人種）の中に自らを位置付けなければならない。このような立場は、確かに『サンスール・ウロペアン』の作家たちの中に存在しており、彼らの分析は種の発展の全般的な地平の中に入り、確かに階級と人類を単位としていたことに留意しておこう。ついで、彼らを区別するものが何なのかを検討したい。しかし、このような展望は、かつてないほど、政治の基礎として、種と人種の歴史としての自然史に向かうことを意味していることが理解されるであろう。クルテの立場は事態をよく要約している。彼が政治の基盤として臨む人間の科学は、人間の自然史である。自然史は、「ある種に属するものとしての」人間、「存在の総体、すなわち自分が一部である属、種、人種との関係において考えられた人間」⁷⁵⁾を考察するものである。彼が強調するように、「人間の科学においては、今日まで、個人の科学しか理解しておらず、種の科学を理解していない。個人の科学では、精神的な存在しか見ていない。」⁷⁶⁾彼は逆に、様々な人種の肉体的、「生来の傾向」に集中することを提案する。「個人の中に人間全体が見られてきた。わたしは人間全体を人種の中に見た。」⁷⁷⁾

サン=シモン主義者の中で、政治の基礎を築くには人種を参照することが必要だと強調したのはルーアンだけではない。その中からギュスタヴ・デシュタルを例にとりたい。デシュタルにとって実際に「国民にとっても、国家にとってもアソシエーションの時が来た。各民族に、その性格と地位から来るそれぞれの能力があり、あらかじめ定められた役割がある。今日、真の政治は、これらの多様な単位を、調和的な集団にまとめることにある」。あるいはさらに、「現在、家族状態に戻すべきなのは民族である。そのためには、民族の組織の関係をまず研究しておかなければならない」⁷⁸⁾。そして、この点に関して真理を打ち出すべきなのは、民族学、すなわち動物学と歴史を結合させた特殊な学問である⁷⁹⁾。これらの引用に含まれているいくつかの課題については、のちに検討する。しかし、そこからわかるのは、政治と自然史とを、より厳密に言えば、自然史と市民の歴史を関連づける人類の歴史とを関連させることの必要性が前提であることだ。このような緊密な関係が、まさに同時期に、ウィリアム=フレデリック・エドワーズ主導のもと、樹立される。彼のおかげで、デュノワイエやコントよりも巧みに、純粹に自然主義的な人種概念と、歴史的概念が統合された。自然主義的概念は、形態学的特徴と異なる類型や、異なる精神的性格を提示する遺伝的変種が人類の中に存在していることに基づいていた。歴史的概念の方は、オーギュスタンとアメデ・ティエリ（Amédée Thierry）によって（コントによるのと同程度）定立されたもので、フォークロア、言語、風俗・習慣、生来の反感によって特定できるような、闘争、支配、混合の関係を描写していた⁸⁰⁾。従って、サン=シモン主義者たちが多数、この人種の科学を研究するいくつかの最初の機関に熱心に参加したことは偶然ではない。歴史と生理学と言語学が交わる場所にあるこの科学は、実際的な事実を提供し、それらを基にして、国家規模また世界規模での新たな社会組織を科学的に構想しなければ

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

ならないと考えられていた。

人種の科学が、サン=シモン主義者が夢見る民族の普遍的アソシエーション政策に提供する「事実」の中には、様々な人種の肉体的・精神的特徴と、それに起因する能力についての情報があった。能力（capacité）の概念は、サン=シモン主義の学説の根本的な要素であり、サン=シモン主義の学説は、社会組織の原則を「各人はその能力に応じて、各能力はその仕事に応じて」と定め、「各個人や各民族が、その自然の傾向によってであれ、その前歴によってであれ、現在の特別な状況によってであれ、最も適した種類の仕事に委ねられうることを望んでいる⁸¹⁾。サン=シモン主義者たちの敵の中には、彼らが「生まれによる貴族や、富による貴族を、能力による貴族」⁸²⁾で置き換えようと望んでいると非難するものがある。事実、例えばクルテにおいては、人種や個人の自然のヒエラルキー全ての基にあるのは、「世界を支配する、常に支配してきたもの、それは能力である（...）能力だけが序列を作る」⁸³⁾という原則である。しかし、この能力の概念は、自由主義的考察においても、自然秩序により適切な社会・政治的秩序の制定を考えるための、同じくらい重要な部分を構成している。旧体制下での「社会の固定した法的分類」は適切ではなく、「実際の優越性」を犠牲にして「偽り」で「人工的な」不平等を維持する秩序であった⁸⁴⁾。デュノワイエが喚起していた通り、「自然の不平等を破壊しようとするところか、逆に偽りの不平等が産出を妨げていた自然の不平等を（特権の撤廃により）出現させることが望まれた。」⁸⁵⁾この文章は、自由主義者たちの多くが、自然の不平等と社会秩序との関係をどのように考えていたかを要約するものである。法的平等はそこでは、自然の不平等が自由に表現されるための条件として表されており、各人はこうして、自分の生来の傾向と労働に応じて自分が本当になり得る（peut）ものになることができる。いずれの場合も、彼らは、個人の間に生来の不平等が存在することは否定している。自由競争が、デュノワイエにとっては、社会秩序と自然秩序を一致させる最良の方法であるからだ⁸⁶⁾。ところで、能力の点でのこれらの生来の不平等を決定する要因の中には、有機的原因がある。すでに見たように、デュノワイエが人類の科学を持ち出して、人種の差異が能力の異なる度合を決めると主張するのは、このレベルにおいてである。逆に、コントは、個人的（individuel）レベルでは、身体組成の差異が、能力の発展に（相対的に）重要であることを確認し、個人から人類へのあらゆる移行を拒否し、人種によって異なる能力があるとは認めていなかった⁸⁷⁾。

サン=シモン主義者たちの方は、デュノワイエよりもはるかに、能力の人種別の決定要因を強調していった。この点はクルテにおいて顕著であり、1831年の『サン=シモン主義ヒエラルキーの指導者たちへ（Aux chefs de la hiérarchie saint-simonienne）』という未刊の覚え書の中で自分の説を述べている。能力は、生物学的な（biologique）意味での誕生による⁸⁸⁾。すなわち能力は、両親の質の合計の平均である、というものだ。こうして、生物学に属し、遺伝的な「生来の不平等」が存在する。「自然主義者（naturalistes）たちは、人間にある、種、人種、家族の

差異を認めている。能力の遺伝的差異は、その差異に由来する。」⁸⁹⁾従って、人種間の生物学的な不平等を出発点に、各個人がその能力に応じて社会組織の中である厳密な地位と機能を占めるのと同様に、民族と人種は、その自然的傾向によって、サン=シモン主義者が求める普遍のアソシエーション計画の中で、異なる機能を果たすべく、言わば運命づけられている⁹⁰⁾。同じ立場が、デシュタルにおいても見られる。ただし彼は、人種間の相対的不平等 (inégalité) よりも、人種別の能力の差異 (différences) と、異なる機能の方をむしろ強調している。

「世界はこのような、才能、人種、年齢、教育、社会的地位の多様性を発展させ、強化することができるような新しい政治を必要としている。(…) 各民族のコントラストを把握し、管理し、使うことができなければならない。そのコントラストは神が各民族に配したもので、それで世界の大分割が記された。しかしまた、これらの差異を尊重しながら、組み合わせ、結びつけ、支配し、共通の利益に奉仕させなければならない。寛容と普遍的アソシエーションの政策が必要なのである。」⁹¹⁾

これは、コスモポリタンのレベルに引き上げられた社会的工学の一形式であることがわかる。人種間の差異（各人種が、固有の性格と資質を示している）と人間家族（共通の運命、進歩という運命に乗り出している）とを調和的な制度を通じて関連づけることを目指すものである。人種の科学こそが「多様な人種の間で、アソシエーションの条件はどのようなものか、その精神的・肉体的能力のゆえに、共同の活動の中のどの部分がどの人種向けなのか」⁹²⁾決定しなければならない。このようにして、デュノワイエの分析の延長において、多かれ少なかれ能動的または受動的な人種、自由と政治活動向きの、多かれ少なかれ巧妙かつ可動的な人種、使用人職や保護対象向けの、多かれ少なかれ怠惰かつ静的な人種を特定していった。この分析は、サン=シモン主義者たちの間では、確定しており、彼らはそれを全体的な対立制度の中に統合した。男女間あるいは東洋・西洋の対立と並行して、この全体的な対立制度を彼らは特に評価していた。しかし、このような分析はサン=シモン主義者だけのものではない。特に、自由を携える（そして自由を、必要とあれば軍事介入によって輸出する）使命という「神聖な使命のしるし」をつけた「フランスの高貴な国民」「平民の人種」「選ばれた人種」の賞賛は、1830年代の共和主義プロパガンダのライトモチーフでもあった⁹³⁾。社会主義者コンスタンタン・ペクール (Constantin Pecqueur) は、その完璧な例を示している。彼によれば

「民族と人種は全てが同様に活動的なわけではない。従って、同様に生産し、豊かになることはないだろう。この不平等が、ヨーロッパとアジア、アジアとアフリカ、コーカサス人種とモンゴル人種、(…) 主として黒色人種と白色人種の間で極端であるから、劣り、軟弱で怠惰な人種が支配的な文明は、ヨーロッパの産業社会によって特に下級なものとされることが予測できる。」⁹⁴⁾

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

いずれの場合にも、「すべての人種、すべての社会が、地上で同じ任務を命じられたわけではない。」それらは異なる使命と社会的機能を持っている。「エネルギーと疲れることのない活力のある、イギリスとアメリカの人種」のようないくつかの人種には、「萎縮症にも近い、嗜眠性の睡眠で眠っている」他の人種を「刺激し」、興奮させる役割がある⁹⁵⁾。いくつかの人種は従って他の人種を豊かにし、自らの例と、その輸出販路の探求、テクノロジーによって、他の人種が生産し、進化し、変化するよう駆り立てに来るのだ。「神は、強い人間たちが、(...)彼らの光を自分たちのためだけに保持することを望まず、(...)抗いようなく、他の人間たちに対して熱心に勧誘し、働きかけることが必要だと感じるようにした。」⁹⁶⁾それが特に、文明化し、豊かさをもたらすというヨーロッパの使命である。その使命に与えられた役割は、自由や平等へと同じく、貿易、産業の発展、規律、労働へと「劣った文明を導く」ことだ。他の文明と言えば、このプロセスにおいて受動的であるか、むしろ眠り込んでいて、「ヨーロッパの生活」の魅力によって覚醒され、「ヨーロッパの文明化の精の千本の腕に抱かれる」のを待っている⁹⁷⁾。

世界での自由の流通、文明の進歩、人種間の関係の3者の間にある緊密で曖昧な関係は、サン=シモン主義者ミシェル・シュヴァリエ（Michel Chevalier）が『北アメリカに関する書簡』の冒頭に書いた序文の中で、完全に例示されている。反革命派カトリック教徒のブラン・ドゥ・サン=ボネ（Blanc de Saint-Bonnet）はその文の中の「人類のネーションに適用された貴族制度」を告発する。その制度によると「文明の進歩は、血の純粋さによる。(…)いくつかの人種は、文明化する血をもち、自らのためにそれを保存するか、それを持たない人種に(…)伝達する。」⁹⁸⁾彼はシュヴァリエの意図をうまく要約していた。シュヴァリエにとっては、「ヨーロッパの民族が属する文明は、東洋から西洋へと地球上を進行する」が、南と北から来た人種の寄与により決定された「曲がりくねった線」を描く。（他のサン=シモン主義者と同様にシュヴァリエにおいても、地中海がこれらの流れが出会う「婚礼の寝台」であるため）これらの寄与は「聖書の2大人種、セム人種とヤベテ人種から来るもので、この2つの人種は、一方は南から、もう一方は北から来て混じり合い、我々の文明の各時期にそれぞれの源泉から新たな力を得る。」⁹⁹⁾この物語においては、様々な人種が、「眠れる文明を目覚めさせる」「刺激」を与えてくれる。文明が「セムの血かヤベテの血の最も純粋な雫を交互に採取する」¹⁰⁰⁾からである。いくつかの受動的な人種が、より能動的なある人種の文明をもたらすという寄与により、覚醒し、刺激されるようだという、この種の人間の歴史の読解が重要であることを強調しなければならない。例えば、デシュタルが黒色人種と白色人種との関係を考えるのは、このようにしてである。「黒人は、孤立し、文明化のイニシアティブを全く持たない。」「至る所で、この集団に属する社会は、白人からの指導を受けない限り、その原始状態、使用人家族の単なる拡張にすぎない状態にとどまる。」¹⁰¹⁾さらにクルテが、「金髪の人種」「コーカサス、大胆なヤベテの人種

(*audax Iapeti genus*) から派生した高貴な家族」が「世界の文明」において演じる根本的な役割を強調するのも、このようにしてである¹⁰²⁾。シュヴァリエの方は、地球規模での文明の流通の結果を告げる際に、再び異なる人種間の影響関係の役割を強調する。彼によれば、実際に、アジアにもう1つ別の文化の中心があり、それは西洋から東洋に進行したものである。それは「西洋文明よりは可動性と能動性が低い」東洋文明である。シュヴァリエの夢は、アメリカがこれらの文明の婚礼の寝床を作り、地中海がセム人種とヤペテ人種の婚礼の寝床となることであった。しかし、この文明の相対的な緩慢さと、より低い可動性を彼はどのように説明するのだろうか。「恐らくそれは、この文明に十分なセムの血がなく、劣等人種の血を持ちすぎているからである。」¹⁰³⁾

この分析の最後の点として、人種間の関係が、このような枠組みの中でどのように考えられたかについて述べる。人種の問題は2つの視点に位置付けられなければならない。世界史と種の発展の分析枠の視点と、未来に関する政治的考察の視点である。解放と、特に奴隷制度の撤廃の必要性という文脈の中にその未来はある。奴隷解放を全ての者が心から願っていたが、廃止後に樹立すべき人種間の関係について考えなければならなかったことを皆が強調している。デシュタルが1847年に民俗学協会で行なったスピーチは明確であった。「(現在の)最大の社会問題は」人種間の関係の問題を提起する「民俗学的問題である」。彼はこうして、国内問題と国際問題の課題の全体を検討し、全てが人種問題に属することを指摘した。特に、ひとたび白色人種による黒色人種の奴隷制度が廃止された後、「この2つの人種の間の特徴的な関係はどのようなになるのか。両者のアソシエーションが成立するための正常な条件はどのようなものか」¹⁰⁴⁾クルテも、1848年の事件の直後、1849年に同様のことを確認している。「これら全ての動乱の動機を検討することによって、闘争が人種問題に関して始まっていることがわかるだろう。」¹⁰⁵⁾クルテの頭の中にあったのは、1848年の奴隷制度廃止のことで、彼はそれを擁護していたが、能力が劣る黒人に対しては適切な後見と保護の制度を設置することが必要であると同時に強調していた。また同時に彼が考えていたのは、社会問題と恒常的貧困のことであり、彼も、他の人々と同じく、それらも部分的には結局は(in fine)人種間の争いに帰着するだろうと考えていた。

これらの問題に関するサン=シモン主義者たちの立場につきまとう、いくつかの曖昧な要素を見直す必要がある。それらは、互いに繋がった2点の上にある。まず、人種間の関係を考えるのに、「普遍的家族」というモデルが援用されていることである。2つ目は、闘争と葛藤の言説を、世界規模でのアソシエーションと平和的組織の言説に置き換えたいという願いである。第1点は、デシュタルがジョン・スチュワート・ミル(John Stuart Mill)に当てた書簡の中に要約されており、その書簡は、アンファンタンがコントに対して行なった批判を反映している。サン=シモン主義者たちは、「その全体としての人間家族」に関心を持ち、文明の継続的な進歩

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

の全般的原則をそこに適用していることを、その主張としている。この枠組みにおいては、「文明の様々な要素、道徳、科学、産業は、かなり不平等な割合で存在し得る。（…）しかし、全体を見ると、これらの割合は規則的なものになる」¹⁰⁶⁾。あるいは、アンファンタンの言い方では、「特別な事実か、逆に全般的な事実、国民の衰退や停滞状態」に関心を持つ代わりに、人類の進歩の一般法則に関心を持つべきなのである¹⁰⁷⁾。このことから、ある結果が生じる。コントの問題は、どこまで各民族と各人種が他と同じレベルに発展できるのかを見て、この発展を妨げていた支配の関係を強調することだったが、サン=シモン主義者たちが関心を持ったのは、それよりもはるかに、人種の間に、自然で適切な関係を設立することであった。各人種は、人間という大家族の中でそれぞれ特殊な機能を果たしている。全般的な（en général）人間家族の進歩に貢献しさえすれば、いくつかの人種と他のいくつかの人種の間の、依存、従属、非対称的交流の関係は、無限に存続することができる。それぞれの人種に、独自の発展の道があり、その道は、人種間の自然な関係という調和的枠組みの中で、人種固有の性質と機能を尊重するものでなくてはならない。

デシュタルが、黒色人種と白色人種の間に識別した自然な関係は、その完璧な例である。彼の目では、いったん解放された黒色人種は、白色人種と同じ資格で、人間家族の中で建設的な地位と機能を果たさなければならなかった。この機能は、その人種の精神的・肉体的資質によるもので、その資質は白色人種の資質とははっきりと異なっている。それは人間家族において、女性が男性と異なるのと同じである。ここで類似が完璧になる——サン=モン主義者たちが、女性解放を重視したこと、しかしそこには曖昧さがあったことは知られている。なぜならば、女性には、家事機能と、つながり、世話、感情の機能が割り振られているからだ。「黒人は人間家族においては女性の人種であるように思われる。それは白人が男性の人種であるのと同様である」。黒人は、家庭内の生活を送る定めであり、「政治・科学的能力はない」が、「心の長所、愛情、家庭的感情を最高度に」持っている¹⁰⁸⁾。女性に関するサン=シモン主義者の分析に関して、サンドリーヌ・ルメール（Sandrine Lemaire）が指摘している。

「（女性の法的解放を求めることで）サン=シモン主義者たちは先駆者になったが、（…）彼らのイデオロギーは、性別の役割を保守的に永続させることに基づいていた。平等は認められていたが、それには、先祖伝来の隷属によって形成された資質は、進化するためのものではなく、未来は性的・社会的な二重性の相互補完性にあるのだから、それらは現状に止まるべきですらあるという公準が伴っていた。」¹⁰⁹⁾

同じ曖昧さが、デシュタルによる、人間家族における黒人の役割再評価においても欠点となっている。例えば、コントやシュルシュールが、黒人のいわゆる自然の資質は、抑圧と奴隷制度

でできた歴史の結果であり、社会の発展に連れて変化しなければならないと主張しているところで¹¹⁰⁾、デシュタルはそれらをむしろ、家族の中の父母の役割に匹敵する、人間家族における永続的な機能として見ていた。

そこから第2点が派生する。人類が、その中に調和的な自然の関係を再び樹立すべき大家族であるなら、そこには紛争の場はない。あるならば、人類の発展の危機的な段階においてであり、人間社会の建設的な組織化を通じて、その段階を脱出しなければならないのである。コントは、生活様式に応じての、能力の不平等な発展に起因する闘争の関係の必要と、その後に続くべき自由のための戦いを強調していた。サン=シモン主義者たち（少なくとも、その中の何名か）の立場はより複雑である。中心的な目標は、敵対関係を、家族の中に存在する関係に匹敵するような、落ち着いた、調和的な関係に置き換えることである。特にアソシエーション（association）の関係である。確かに、このアソシエーションの展望と、それが意味する世界主義（コスモポリタニズム）を讃えることができるだろう。その展望が目指すのは、人種の征服と戦争に基づいた読解を、人種間のアソシエーションの論理とし（国内レベルでは、資本と労働のアソシエーションを促進することで、階級間の矛盾を解消することが目指されていたように）、「人間の諸社会の間に、人種間の自然の親近性に基づくが故に、より強力な関係を樹立する」¹¹¹⁾ことである点に注目したのである。しかし、すぐに注意しなければならないことは、これらの平和なアソシエーションは人種のヒエラルキー的・機能的関係というヴィジョンに基づいていたことだ。そのような関係には、地球規模での調和、労働分割、社会組織の言説の下で、各人種をその性質に基づく既存の役割の中に固定することで、支配と搾取の関係を永続させる傾向がある。しかもサン=シモン主義は、地球全体の活用、資本と富の動員、無為の人々と受動的な人種の「活性化」の必要を原則としたので、アソシエーションと、生産・商業へのイニシエーションを隠れ蓑に、介入や植民地化を容易に正当化できたことを付け加えよう。そのことを、感動的な率直さでアンファンタンが述べている。「我々は、科学のくびきや、信用の独裁を恐れない。なぜならば科学や信用が抑圧（opprimer）できるとしたら、その抑圧は無為にとつてのみ有害になるからだ。」¹¹²⁾「自由の名のもとに、完全に抑圧することができる」とサルトル（Sartre）は言っていた。おそらく19世紀の自由主義作家の多くの思索は、次の文章の例証であろう。多様な民族を人類共通の運命の中で結びつけようと言う意志を名目に、抑圧することができる。普遍的なアソシエーションにおけるそれぞれの機能を管理すると言う名目で、活動、産業、文明に「イニシエーションをする」ことでも、抑圧することができる。これが、社会主義者コンスタンタン・ペクールが擁護した世界主義（コスモポリタニズム）にもつきまとう曖昧さである¹¹³⁾。

クルテはこれらの問題を巧みに解説している。彼にとっては、人種は当然平等ではなく、これらの自然の不平等に起因して、能力の不平等と人間家族における序列があることは疑いがな

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

く、「子供の人種と、大人の人種」¹¹⁴⁾があるから、奴隷制度の廃止や平等の宣言は、能力のある人種とない人種との間の、自然な不平等や依存の関係を解消するには十分ではないだろう。「力が何よりもまず、神がその特権を与えた人々に、義務を課す。イニシエーションの仕事、監督は、大人のものだ。しかし、不実な監督者に呪いあれ」¹¹⁵⁾。そこから、クルテが定期的に表明した「廃止のこちら側ではなく、あちら側に」いるようにすべきだという配慮が来ている。奴隷制度という法的に不平等な関係を廃止することは良いが、その後、各人種の性質に適した、別の監督関係が成立するようにしなければならない。

「これらの人々をヨーロッパの隷属から引き離せ。できるなら、アフリカの原住民の隷属から引き離せ。けれども、彼らを、より大きな隷属の中、より深い荒廃の中、より残酷な苦しみの中に突き落としてしまうことを恐れよ。解放の旗をかざすことは素晴らしい。しかし、ある絆を断ち切るなら、別の絆を作ることを考えよ。我々の兄弟たちに、平等の歓待を提供するためには、少なくとも彼らに避難所を準備することから始めよ。」¹¹⁶⁾

サン=シモン主義のアソシエーションは、その語のもっとも強い意味で、父親温情主義（paternalisme）モデルに基づいている。普遍的家族には、確かに、父、母、子供達がいるが、監督、イニシエーションや指導の役割、能動的・政治的役割は、父のもの、すなわち、白色人種またはヨーロッパ人種という、活動的、産業的、外向的な人種のものである。

しかし、デシュタルやクルテ、また同時期の多数の作家において遍在する力動的（dynamique）な要素があり、それがこの静的な機能秩序を若干修正していることを明記すべきであろう。それが、人種間の交配あるいは混合である¹¹⁷⁾。クルテのように、能力や社会的不平等が、結局は、人種間の遺伝的な生来の不平等によって決定されと考えるのなら、不平等を是正する唯一の方法は、人種間の交配である。優等の階級は「劣等階級と融合することで、その血を伝達する。（...）この連続的な混合によって、両者間の生来の不平等が徐々に消え、劣等階級は改善され、時が経つと共に、特権階級と対等になる。」その結果、「自然の不平等と社会的不平等の漸次的消滅」が起きる。それが「全ての革命の秘密（...）、あらゆる特権の段階的廃止と社会の貧困階級の漸次的解放の秘密」¹¹⁸⁾であるとクルテはつけ加える。クルテによって提案されたヴィジョンは次の通りである。社会的不平等の各体制が、生物学的不平等の体制に対応している。それは、社会的不平等が人種の不平等に対応している制度である特権階級体制から、「プロレタリアートは、優等階級に比べて劣った能力を有して生まれる」¹¹⁹⁾という産業プロレタリアート体制に至るまでそうである。各段階で体制が変化し、生物学的能力と社会的序列がもはや必ずしも対応しないようになるのは、異人種間の生殖への障害の解消と、異人種間の結婚によってである。この分析の結果は明らかである。実際の平等に到達する唯一の手段は、特

権の廃止でも、奴隷制度自体の廃止でもなく、血の混合と、白人と黒人の混血の階級を形成することなのである。同じ提案はデシュタルの著作の中にも現れ、彼は人間の普遍的な家族との類似を最後までつきつめ、白色人種が男性の父親的人種であり、黒色人種が女性の母親的人種であるから、両人種は（少なくとも、白色人種と黒色人種が会おう運命にある「赤道」地帯では）、「2つの人種の子供」であり、そのアソシエーションを助長するような人種を産出しなければならないと考える¹²⁰⁾。しかし、人間家族が向かっている平等と自由の普遍的展望を完全に実現するには、文明と教育の仕事も、不当な特権、法的区別の撤廃も十分ではないという立場を、最もよく要約しているのは、おそらく社会主義者コンスタンタン・ペクルであろう。実際に、最終的には、この統一と解放の仕事は、自然の障害に衝突し、それが人種間の不平等で、この不平等は、合理的な混血政策によってしか解消され得ない。「平等が、望ましく、合法的なものになるために求められるのは、各人が、知性の光明、道徳性、自らの統治、自由な人間の社会の基本法の順守の段階に到達することができる（capable）ことである」¹²¹⁾。ここでは『サンスール・ウロペアン』ですでに提起されていた問題が語られていることがわかるであろう。普遍的なレベルで平等を実現するためには、能力（capacités）の面で事実として（de fait）存在している不平等や区別を削減しなければならない。精神的な視点ではそれは、文明によりなされるが、そのためには、あらかじめ肉体的（physique）資質を平等にすることが前提となる。この準備は「人種の普遍的な混交」にあるのだ。

「あるときに生理学的に劣る人種の間にある実際の距離が、より短くなるためには、結びつきや交配が、自然、組織（原始的または現在の事象による）が作ったように見える隔たりを近づけることが必要である。それがなければ、（劣等民族が）絶対的にその人となりのままで兄弟と見なされ、すべての教育と啓蒙の道によって、優等の人種から解放されたと見なされることはないだろう。理性と義務が望むにも関わらず、その純粋な生殖によるならば、彼らは相変わらず一定の完成度の度合いを越えることができないであろう。その組成が運命的に完成度を制限しているようであるからだ」¹²²⁾。

註

- 1) Victor Courtet de L'Isle, *La science politique fondée sur la science de l'Homme*, Paris, Arthus Bertrand, 1838; D'Eichthal, Gustave et Urbain, Ismaÿl, *Lettres sur la race noire et la race blanche*, Paris, Paulin, 1839.
- 2) Charles Dunoyer, *L'industrie et la morale considérées dans leurs rapports avec la liberté*, Paris, Sautetlet, 1825; Charles Comte, *Traité de législation*, Paris, Sautetlet, 1826-1827
- 3) この2紙についてはエフラン・アルパス (Ephraïm Harpaz) の古典的研究を参照すること。

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロソ）

Le Censeur. Le Censeur Européen. Histoire d'un journal libéral et industrialiste, Genève, Slakhtine, 2000. (再刊)

- 4) 同様の移行を同時期に行ったのは彼らだけではない。例えばギゾー (Guizot) (cf. Paul Rosanvallon, *Le moment Guizot*, Paris, Gallimard, 1985, p. 35-72) やサン=シモン Saint-Simon も同様の思考変化を遂げていた。より詳しくは、拙著参照のこと。Doron, Claude-Olivier, *Races et dégénérescence*. 博士論文, 2011, p. 1114-1171.
- 5) *Le Censeur européen* に 1817 年から 1819 年にかけて掲載された一連の記事 «Vue des révolutions d'Angleterre» を参照のこと。それらの記事は加筆変更され再刊された。Histoire de la conquête de l'Angleterre par les Normands (Didot, Paris, 1825) あるいは « Sur l'antipathie de race qui divise la nation française » という標題で *Dix ans d'études historiques* の中で再刊された 1820 年 4 月 2 日の記事 (*Oeuvres complètes*, Hauman, Bruxelles, 1839, p. 631-634)
- 6) コントとデュノワイエに関しては特に参照 David Mercer Hart, *Class analysis, slavery and the industrial theory of history in French liberal thought, 1814-1830 : the radical liberalism of Charles Comte and Charles Dunoyer*, PhD dissertation 1997; Leonard Liggio, « Charles Dunoyer and french classical liberalism », *Journal of Libertarian Studies*, vol. 1, no. 3, 1977, p. 153-178.
- 7) ジャン・ボワセル (Jean Boissel), フィリップ・レニエ (Philippe Régner), ロイック・リニョル (Loïc Rignol) が、コルテヤとサン=シモン主義者やオギュスタン・ティエリの著作を細かく研究しているだけに、とりわけこのケースは顕著である。しかし, Eric Michaud, *Les invasions barbares. Une généalogie de l'histoire de l'art* (Paris, Gallimard, 2015) にある、デュノワイエについての短い記述も参照のこと。
- 8) *Op. cit.*, p. 108
- 9) Benjamin Constant, « De M. Dunoyer et de quelques uns de ses ouvrages », *Mélanges de littérature et de politique*, Louvain, Michel, 1830, p. 101
- 10) このような経済的読解は、かなりの部分をジャン=バティスト・セイの著作、とりわけ『政治経済学論 (Traité d'économie politique)』から着想を得ている。1814 年に再版された同著は、『サンスール・ウロペアン』の寄稿者たちや産業主義の理論家たちの経済的考察において、決定的な役割を演じている。
- 11) オギュスタン・ティエリの著作全体がこれら 2 つの次元を完全に例示している。例えば, Loïc Rignol, « Augustin Thierry et la politique de l'histoire », *Revue d'histoire du XIXe siècle*, 25/2002, p. 87-100. を参照のこと。
- 12) 2 人はここでは 2 つの伝統の延長線上にある。スコットランド啓蒙思想 (Scottish Enlightenment), 特にアダム・スミス (Adam Smith) とファーガソン (Ferguson) の伝統と、チュルゴ (Turgot) や、コンドルセ (Condorcet) とその継承者イデオログ (Idéologues) たちのような、フランス啓蒙思想の何人かの作家の伝統である。この問題については拙論 Doron, C-O, *L'homme altéré*, Champ Vallon, Ceyzérieu, 2016, p. 388-414 また特にスコットランド啓蒙思想については Meek, R. *Social science & the ignoble savage*, Cambridge Univ. Press, Cambridge, 1976 及び Sebastiani, S., *I limiti del progresso*, Il Mulino, Bologna, 2008. を参照のこと。
- 13) Dunoyer, *op. cit.*, p. 353.
- 14) Cf. *L'homme altéré*, *op. cit.*, p. 388-414.
- 15) *Op. cit.*, p. 29. 強調部分は本論著者による。
- 16) *Ibid.*, p. 41.

- 17) Ibid., p. 39-40
- 18) 例えば Comte, *Traité de législation*, op. cit., T. I, p. 45-52. を参照のこと。
- 19) *Le Censeur européen*, avant-propos, T. I, Paris, 1817, p. III.
- 20) Ibid.
- 21) Ibid., p. 4-5. コントは、その政治哲学の基礎として役立つ次のような全般原則に到達することになる。ネーションの法律、風俗・習慣、機関・制度は「人間、あるいはより適切な言い方をすれば、人間の組織の必要と能力の結果である。」(*Traité de législation*, op. cit., T. I, p. 151)。
- 22) Dunoyer, op. cit., p. 3.
- 23) デュノワイエは精神科学・政治学アカデミーでの自分の研究のいくつかを要約している。Dunoyer, *Séances et travaux de l'Académie des sciences morales et politiques*, T. VI, Paris, Moniteur Universel, 1844, p. 368
- 24) このテーマについては *L'homme altéré*, op. cit., p. 334-356. を参照のこと。
- 25) *Traité de législation*, op. cit., T.II, p. 50
- 26) Ibid., p. 112.
- 27) Ibid., T. III, p. 428
- 28) この点について、『サンスール・ウロペアン』の作家たちは、いくつかの分析方針を関連づけ、歴史の根本的な原動力としての人種間闘争の真の理論を提案する。一方には、制度・機関と社会体制全体の原則としての、征服と外国人征服者により課されるくびきという古いモチーフがある。このモチーフは、第3身分と17世紀以来のフランス絶対王政との提携に反対し、貴族の自律を擁護する作家（そのもっとも有名な代表者がブランヴィリエ (Boulainvilliers) である）の側にも、イギリス側にも見られる。イギリスでは、ノルマンディ制服の際にアングロ・サクソン民族に課せられた「ノルマンのくびき」を描写する際にこのモチーフが使われるが、「ノルマンのくびき」は内戦の際に、様々な急進運動にとっては王制と貴族制度の告発に役立っていた。(cf. C. Hill, *Puritanism & Revolution*, Martin Secker & Warburg, 1958, chap. 3) このモチーフは、フランス史の鍵としてモンロジエ (Montlosier) により再び使用されたばかりでもあった。彼はそれをフランスの近代史、大革命、現代社会の解説原則とし、彼の名付ける旧市民と（コミューンの解放から派生した）新市民の間の紛争的な社会関係を描いた。『サンスール・ウロペアン』の作家たちは、モンロジエによって提案された読解からかなりのヒントを得ている。さらに彼らはそこに、政治・経済的次元をつけ加えた。ジャン＝バティスト・セイの研究に着想した生産者と寄生者との間の根本的な対立と、バンジャマン・コンスタンが『征服の精神について (De l'esprit de conquête)』において提案した考察を結びつけたものである。
- 29) «De la multiplication des pauvres, des gens à place et des gens à pensions», *Le Censeur européen*, T. VII, 1818, p. 1-2.
- 30) «Considérations sur l'état moral de la nation française», art. cit., p. 5831) ウォーデン (Warden) による解説 *Description statistique, historique et politique des Etats-Unis*. 初出『サンスール・ウロペアン』1820年4月2日号, *Dix ans d'études historiques*, in *Oeuvres complètes*, op. cit., p. 631-632. に再刊。
- 32) «Considérations sur l'état moral de la nation française», art. cit.
- 33) *Traité de législation*, op. cit., T. IV, p. 486.
- 34) 下記 p. 26 以降を参照のこと。
- 35) Op. cit., p. 65. デュノワイエの分析について、さらなる詳細は *L'homme altéré*, op. cit., p. 350-

360. を参照のこと。

- 36) *Ibid.*, p. 56.
- 37) *Ibid.*, p. 84.
- 38) *L'homme altéré, op. cit.*
- 39) *Traité de législation, op. cit.*, T. II, p. 51.
- 40) *Ibid.*, p. 62
- 41) *Ibid.*, p. 63.
- 42) *Ibid.*, p. 41.
- 43) *Ibid.*, p. 44.
- 44) *Ibid.*, p. 62.
- 45) *Ibid.*, p. 41.
- 46) *Ibid.*, p. 63-64.
- 47) *Ibid.*, p. 108.
- 48) *Traité de législation, op. cit.*, T. III, p. 486-487.
- 49) *Dunoyer, op. cit.*, p. 55.
- 50) *Ibid.*, p. 69
- 51) *Ibid.*, p. 60
- 52) *Ibid.*, p. 72
- 53) *Ibid.*, p. 73
- 54) *Ibid.*, p. 82
- 55) *Ibid.*, p. 87
- 56) *Ibid.*, p. 76
- 57) *Ibid.*, p. 75
- 58) Cf. *infra*.
- 59) *Traité de législation, op. cit.*, T. II, p. 114-132.
- 60) *Ibid.*, p. 257-270
- 61) *Traité de législation, op. cit.*, T. III, p. 390 et sqs.
- 62) *Traité de législation, op. cit.*, T. IV, p. 497 et sqs.
- 63) 人種の科学の発展におけるサン=シモン主義者の役割については、特に Rignol, Loïc, *Les hiéroglyphes de la nature*, Presses du réel, 2014 ; Régnier, Philippe (dir.), *Etudes saint-simoniennes*, Presses Universitaires de Lyon, Lyon, 2002 et «Du côté de chez Saint-Simon : question raciale, question sociale et question religieuse», *Romantisme*, 130/4, 2005, p. 23-37. を参照のこと。
- 64) 公教育大臣ヴィルマン (Villemain) 署名の、協会設立を定める 1839 年 8 月 20 日の政令での表現。in *Mémoires de la Société ethnologique*, Paris, Librairie Orientale, 1841, T. I, p. II.
- 65) 協会とその構成員については T. Bernon, «La science des races : la Société ethnologique et le tournant colonial (1839-1848)», *La Révolution Française*, 15/2018, p. 1-56.
- 66) 例として D'Eichthal, Gustave et Urbain, Ismaÿl, *Lettres sur la race noire et la race blanche*, Paris, Paulin, 1839, p. 12 においてはこの関係が実に明白である。この点で最もカリカチュア的な例は、共和派の旅行家、冒険家、博物学者であるドムニ・ドゥ・リアンジ (Domeny de Rienzi) の著作である。特に人種間の生来の不平等と特に黒色人種の劣等性に関する明確な宣言文の筆者であると同時に、奴隷制度の廃止と、有色の自由人の被る全ての法的不平等の解消を訴えた嘆願書

- (*Pétition des hommes libres de couleur de l'île de Bourbon* (Paris, Auguste, 1831)) の作者でもある。
- 67) Gouhier, H., *La jeunesse d'Auguste Comte et la formation du positivisme*, Paris, Vrin, 1933, T. 3, p. 152; Denieul Cormier, A., *Augustin Thierry. L'histoire autrement*, Publisud, 1996, p. 42-202.
- 68) Rouen, «Examen d'un nouvel ouvrage de M. Dunoyer», 3^e article, *Le producteur*, T. III, Paris, Sautelet, 1826, p. 134-135.
- 69) Rouen, «Examen d'un nouvel ouvrage de M. Dunoyer», 1^{er} article, *Le producteur*, T.II, Sautelet, 1826, p. 158
- 70) *Ibid.*, p. 160.
- 71) *Op. cit.*, p. 397.
- 72) *Ibid.*, p. 167 et 383-384.
- 73) この議論を機会に、個人主義という概念そのものが、政治学の語彙に入ったことを喚起したい。M-F Piguet, *Individualisme. Une enquête sur les sources du mot*, Paris, CNRS éditions, 2018を参照のこと。
- 74) Rouen, *art. cit.*, p. 160
- 75) *Op. cit.*, p. II
- 76) *Ibid.*, p. V.
- 77) *Ibid.*, p. VIII.
- 78) *Les deux mondes... servant d'introduction à l'ouvrage de M. Urquhart*, La Turquie et ses ressources, Leipzig, 1837, p. 78 及び Lemaire, S. «Gustave D'Eichthal ou les ambiguïtés d'une ethnologie saint-simoniennes», *Etudes saint-simoniennes*, *op. cit.*, p. 160. に引用されたデシュタルからアンファンタン (Enfantin) への 1839 年 10 月 17 日付の書簡
- 79) 『黒色人種と白色人種に関する書簡(*Lettres sur la race noire et la race blanche*)』は「動物学者」に捧げられており、その冒頭は以下のものである。「黒色人種と白色人種の連携は単なる精神的・政治的問題ではない。それはまた、何よりも動物学的問題である。(…) この二つの人種間の精神的、政治的關係は、当然、2つを互いに結びつける自然な組織の關係の結果にすぎない。その結果には特殊な機能があり、その機能は、2つの人種のそれぞれが、諸人種全体の生活において果たすものである。」(*op. cit.*, p. 5-6)
- 80) W-F Edwards, *Des caractères physiologiques des races humaines, considérés dans leurs rapports avec l'histoire*, Paris, Compère Jeune, 1829. を特に参照のこと。この自然主義的人種概念と歴史的な概念との緊密な關係は、歴史研究所 (l'Institut Historique) (副所長フィリップ・ビュシェーズ (Philippe Buchez) 自身が、元サン=シモン主義者である) の後援で 1835 年に開催されたヨーロッパ歴史會議 (*Congrès historique européen*) の際に活発に議論されることになった。また、パリ民族学協會の創設において支配的であったのも、2者のこのような関連付けである。
- 81) Charléty, S., *Histoire du Saint-Simonisme*, Paris, Gonthier, 1931, p. 35.
- 82) Alphonse de Boissieu, *Les Saint-Simoniens*, Lyon, Gabriel Rossary, 1831, p. 13.
- 83) 『サン=シモン主義ヒエラルキーの指導者たちへ (Aux chefs de la hiérarchie saint-simonienne)』(1831) の覚え書。Boissel, J., *Victor Courtet (1813-1867). Premier théoricien de la hiérarchie des races*, Paris, PUF, 1972, p. 33. に引用。
- 84) ギゾー (Guizot), *Des moyens de gouvernement et d'opposition dans l'état actuel de la France*, Paris, L'Advocat, 1821, p. 151 et 160 の表現による。自由主義の考察は、何よりも、各人の能力が

人種、自由、平等、博愛フランスにおける科学と政治の間での「人種」概念の来歴（1815-1840）（ドロン）

発揮できるような政府の体制を見つめることを目指しており、その政府のおかげで、有名なジェファーソン（Jefferson）の表現を借用すると「生来の貴族（aristoi）」を選別できるとしていたことを喚起するべきであろう。

85) Dunoyer, *op. cit.*, p. 279.

86) これはまた、クルテが考えていることでもある。「能力別の序列をどのように作るのか」とクルテは考える。「普遍的な競争の中で (...) 個人をそれに固有の力に」委ねることによってである。この「全般的な競争」, 「この“競争”こそが、個人に対し、その能力の最良の序列を」保証するのである (in Boissel, *op. cit.*, p. 34 の引用)。ギゾーも同様のことを主張する (*op. cit.*, p. 158)。この問題に関する議論については Doron, *Races et dégénérescence*, *op. cit.*, p. 1117-1140 を参照のこと。これまた元サン=シモン主義者である社会主義者コンスタンタン・ペクール (Constantin Pecqueur) は、自由競争を、世界レベルでの人種の序列付けの主要な原則にしていた。彼は各人種には「人種の能力と素質が、土地、近隣、制度・機関の状況と組み合わせられて、指定する、特別な機能」があるとしている。世界主義（コスモポリタニズム）は、「産業的機能の適切で自然な配分と、国際的な労働分割」に向かうべきであり、「我々が、性格を自由に発展させ、個人が、自分の努力や、(...) 固有で潜在的なエネルギーや、活動や、意志や、偶然にして運命的な機会に応じて、自分自身で社会の中に入るままにするように、人種に対しても、機能、優越性、力、啓蒙、功績の大きなヒエラルキーの中で自分の序列を決めるその自由な能力に任せたい。」 (Constantin Pecqueur, *Economie sociale. Des intérêts du commerce, de l'industrie, de l'agriculture sous l'influence des applications de la vapeur*, Paris, Desessart, 1839, t. I, p. 243-244 et t. II, p. 337-338. ペクールに関しては拙論参照のこと。Doron, C-O «Le cosmopolitisme ambigu de Constantin Pecqueur», *Le magasin du XIXe siècle*, 2018, p. 117-125.

87) Cf. Comte, *op. cit.*, T. II, p. 47-50.

88) 能力の生物学的遺伝 (hérédité) と法的な相続権 (hérédité) の区別はクルテにおいては重要である。その区別こそが、なぜ能力は遺伝的であるとしながらも、「あらゆる世襲貴族領制度」と不動産の相続制度の廃止が必要だと考えた理由を説明するものである。クルテは廃止後、不動産を「最も強く、最も巧みで、最も有能な者に主として有利な (...) 競争の領域に」おくべきであると考えている。 (in Boissel, *op. cit.*, p. 50).

89) テヴノー (Thévenot) への第2の書簡。Boissel, *op. cit.*, p. 45. に引用。より広くは、p. 30-50. を参照のこと

90) 人種間の混血と交配による、生物学的不平等の漸次的解消を通じて以外の場合。後に取り上げるが、人種間の混血と交配は、クルテも、デシュテルやペクールと同様に民族間の漸次的平等化の手段となる、力動的な要因であると考えている。

91) *Les deux mondes*, *op. cit.*, p. 337.

92) D'Eichthal, «Discours d'ouverture de la séance de 26/02/1847» de la Société ethnologique in *Bulletins de la Société ethnologique*, années 1846-1847, t. I, Paris, p. 45

93) Darriulat, P., *Les patriotes. La gauche républicaine et la Nation*, 1830-1870, Paris, Seuil, 2001, p. 13-25 を参照のこと。

94) *Ibid.*, t. II, p. 278-279.

95) *Ibid.*, t. I, p. 247 et 229.

96) *Ibid.*, t. II, p. 371-372.

97) *Ibid.*, p. 305.

- 98) Blanc de Saint-Bonnet, A., *De l'unité spirituelle*, 1841, t. I, p. 218.
- 99) Chevalier, M., *Lettres sur l'Amérique du Nord*, Paris, Gosselin, 1836, T. I, p. III-IV
- 100) *Ibid.*, p. IV
- 101) D'Eichthal, «Quels sont les caractères distinctifs de la race blanche et de la race noire», Séance du 23/04/1847, in *Bulletins de la Société ethnologique*, *op. cit.* Année 1847, 2e semestre, p. 67-68
- 102) Courtet, «Etude historique sur les peuples de race blonde», *La revue indépendante*, 7e année, 2e série, 1847, p. 438.
- 103) *Op. cit.*, p. V.
- 104) D'Eichthal, «Discours d'ouverture de la séance de 26/02/1847», *op. cit.*, p. 45 et séance du 23/04/1847, *op. cit.*, p. 67.
- 105) Courtet, *Tableau ethnographique du genre humain*, Paris, Arthus Bertrand, 1849, p. I.
- 106) Lettre de D'Eichthal à John Stuart Mill du 23/11/1829 in John Stuart Mill, *Correspondance inédite avec Gustave D'Eichthal*, Paris, Alcan, 1898, p. 49.
- 107) Enfantin, «Compte rendu de C. Comte, *Traité de législation*», in *Le producteur*, III, *op. cit.*, p. 423.
- 108) *Lettres sur la race noire et la race blanche*, *op. cit.*, p. 22
- 109) *Art. cit.*, p. 157.
- 110) 例えば, 1847 年 6 月 25 日の会議でのクルテの発表に対するシュルシェールの回答を参照のこと。Bulletin de la Société ethnologique, *op. cit.*, p. 207
- 111) D'Eichthal, «Discours du 26/02/1847», *op. cit.*, p. 48.
- 112) Enfantin, *art. cit.*, p. 422.
- 113) Cf. Doron, «Le cosmopolitisme ambigu de Constantin Pecqueur», *art. cit.*
- 114) Courtet, Discussion sur les caractères distinctifs de la race blanche et de la race noire, 25/06/1847 in *Bulletins de la Société Ethnologique*, *op. cit.*, p. 204.
- 115) *Ibid.*, p. 205.
- 116) *Ibid.*, p. 206.
- 117) この問題については Rignol, L., *Les hiéroglyphes de la nature*, *op. cit.* 及び Doron, *L'homme altéré*, *op. cit.*, p. 238-264 を参照のこと。
- 118) « Aux chefs de la hiérarchie saint-simonienne », in Boissel, *op. cit.*, p. 32.
- 119) *Ibid.*
- 120) *Lettres sur la race noire et la race blanche*, *op. cit.*, p. 59.
- 121) *Economie sociale*, *op. cit.*, T. II, p. 33.
- 122) *Ibid.*, p.330-331

要 旨

本稿は、19世紀初頭のフランスの政治学に「人種の科学」が導入された状況と、この状況が人々の解放や権利の平等を促進する自由主義者、社会主義者、サン=シモン主義者などの政治運動とどのように関連していたのかを検証する。この導入が、王政復古中のフランスにおける自由主義の伝統の内側において——サンスール学派（Censeur: 監察官）であったシャルル・コント、シャルル・デュノワイエ、オギュスタン・ティエリに代表される——生じた変化とどのように関連していたのかを提示する。自由など人間の本質の普遍的な実現を妨げる障害を理解するために、人種が導入された。これらの障害は、多くの自由主義者が考えたような司法制度や政治制度の中にはなく、社会の内側にあった。この導入によって、彼らは人種に関する自然主義的および歴史的知識を政治学に紹介し、人種が社会に与える影響について二重の解釈を展開するようになった。デュノワイエによって例示された最初の解釈は、精神的および道徳的能力において人種は生来的に不平等であり、したがって文明と自由をつかみ取るのに不平等があると主張した。コントとティエリーに代表されるいま1つの解釈は、それぞれの文明において、征服する人種と征服される人種の闘争によって世界の歴史がどのように刻まれてきたのかという主張である。この闘争が語るのは、世界中において実現されてきた自由のさまざまな度合いである。本稿の後半部では、これらの主張が、1830年代から1840年代にかけてパリ民族学会の初期の重要なメンバーであったギュスタヴ・デシュタルやヴィクトル・クルテなどサン=シモン主義者たちによって、どのように強化され、変換されたのかを検証する。クルテが、人種は生来的に不平等であるとしたデュノワイエの考えを根本的にどのように強化したのか、そしてそれが社会の歴史と運命をどのように決定したのかを提示する。さらにクルテとデュノワイエの考えが、自由主義派とサン=シモン派の間で頻繁に確認することができる権利の平等と能力の生来的な不平等の区別とどのように関連しなければならなかったかを提示する。またデシュタルとクルテが、人類全体の進歩のために、それぞれの性質と能力に応じた場所を持つべき人種として、どのように異なる人種を普遍的な人類の家族に位置付けるよう提案したのかを模索したい。

キーワード: 人種, 自由主義, 政治学, サン=シモン主義, 人種差別

Sommaire

Cet article étudie les conditions de l'introduction de la science des races en politique en France, au début du XIXe siècle, et montre comment elle fut le fait de courants revendiquant l'émancipation, la liberté et l'égalité des droits, qu'il s'agisse de libéraux, de socialistes ou de saint-simoniens. Dans un premier temps, je montre comment l'introduction de la question des races en politique est liée à un déplacement dans la tradition libérale, opéré par l'école du Censeur (Charles Comte, Charles Dunoyer, Augustin Thierry), qui va chercher les obstacles à la réalisation de la liberté dans les bases anthropologiques des sociétés et non dans les formes institutionnelles. Ce déplacement les conduit à intégrer les savoirs naturalistes et historiques dans l'analyse politique et à développer une double analyse de la question des races. D'un côté, les races apparaissent comme naturellement inégales et incapables d'atteindre au même degré de liberté (Dunoyer); de l'autre, ils constatent une opposition universelle entre races parasites, conquérantes, et races travailleuses, conquises, qui se traduit par une lutte pour l'émancipation des secondes (Comte et Thierry). Dans un second temps, j'examine comment ces analyses furent reprises et transformées dans les années 1830-1840 par des auteurs saint-simoniens comme Courtet de L'Isle, qui renforce l'affirmation de l'inégalité naturelle et le déterminisme racial de Dunoyer; et Gustave d'Eichthal, qui propose un projet général d'association des races, en fonction de leurs capacités différentes, dans la famille universelle de l'humanité.

Mots clés: race, libéralisme, sciences politiques, Saint-simonisme, racisme